

第4章 実践的研究の具体的展開

本章で取り上げた実践例は、今日的な教育課題に基づくものである。掲載に当たっては、各教科等や領域に偏りがないようにした。また、研究方法の特徴が読み取れる部分を中心とした内容にまとめた。そこで、研究方法と関連を図りながら読み進めることで、研究の手がかりとなるようにした。

「総合的な学習の時間」については、研究を進める際の手がかりとなる視点や方法を述べた。

第1節 教科指導に関する研究

I 問題解決的な学習に関する指導

◆ 実践例1（授業研究）—小4 社会—

本実践例は、問題解決的な学習の過程で、身近な地域社会で生活する様々な人々の思いや願い、行動や考えに児童が主体的に出会う活動を取り入れることにより、地域社会の一員としての自覚を促すようにしたものである。具体的には、よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願いに出会うこと、地域社会で活躍している人や地域社会の発展に貢献した人の行動に出会うこと、自分たちの生活に出会うこと、地域の人々の共感に出会うことで、地域社会の一員としての自覚を促すよう指導を工夫した実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、育成したい資質や能力を目指す子供として構想することである。

本実践例は、「地域の人々の思いや願い、行動や考え、自分たちの生活、地域の人々の共感」にそれぞれ出会うための活動を、子供の興味・関心に応じて複線化・弾力化し、地域社会へ参画しようとする児童を育てていこうと研究を進めた。また、児童の発達段階から考え、自覚した姿としてとらえるのではなく、自覚に迫る姿としてとらえたことに意義がある。

地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫

—出会いの活動を取り入れて—

I 主題設定の理由

地域社会は、子供たちにとって身近な学習の場であり、そこには豊富な体験や経験の場が用意されている。子供たちは、地域社会の多くの人々に、じかに触れながら感動や驚きなどを実感することができ、人間の生き方やその心、考え方などを学ぶことができる。このような体験や経験を通して、子供たちは、問題意識をもち、その解決を図る過程で関連する多くの社会的事象に出会う。

そして、社会的事象の共通点や相違点を比較してその特色をとらえたり、社会的事象相互に関連付けたりしながら、自分の生活、社会の成り立ちや仕組みを考えられるようになる。

また、観点を自分から別の立場の人に移すなどして社会的事象を多面的にとらえることにより、社会的なものの見方や考え方を広げていくことができる。さらに、学習して得た成果を、学校はもとより、家庭や地域社会での日常生活に生かすことにより、社会的なものの見方や考え方は確かなものになり、子供たちの中に協調性や社会性が育っていく。

これからの社会科の学習においては、問題解決的な学習を展開する中で、地域教材から学ぶという方向だけでなく、学習した成果を地域社会の発展に役立てていくように努め、地域社会と学校の双方向のつながりを強めていくことが必要である。そして、子供たち一人一人が、地域社会と自分の生活とのつながりをとらえ、地域社会を構成している一員であることを自覚できるようにすることが大切である。

そこで、問題解決的な学習の過程に、身近な地域社会で生活する様々な人々の思いや願い、行動や考えに児童が主体的に出会う活動を取り入れることで、地域社会の一員としての自覚を促すことができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

身近な地域の社会的事象を教材に、問題解決的な学習の過程に出会いの活動を取り入れることにより、地域社会の一員としての自覚を促すことに有効であることを実践を通して明らかにする。

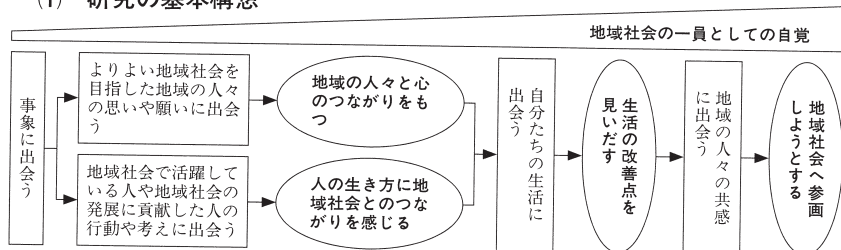
III 研究の見通し

- a よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願いに出会う活動を行えば、地域の人々が自分と共通する生活上の思いや願いをもっていることに気づき、心のつながりをもつだろう。
- b 地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の行動や考えに出会う活動を行えば、その人々の努力や工夫に気づき、生き方に地域社会とのつながりを感じるだろう。
- c よりよい地域社会づくりという観点から、これまでの自分たちの生活に出会う活動を行えば、よりよい地域社会づくりは自分自身から始められることに気づき、自分の生活の改善点を見いだすだろう。
- d クラスの仲間で考えた地域社会への提案について、地域の人々の共感に出会う活動を行えば、自分も地域の人々と一緒に地域社会づくりに参加することができる存在であると感じ、地域社会に参画しようとする気持ちをもつだろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 研究の基本構想



(2) 地域社会の一員としての自覚について

地域社会には、豊かな自然や人々がつくり上げてきた歴史や文化がある。地域で暮らす人々は、そこから多くの恩恵を受ける一方で、新しい地域社会づくりの担い手としての役割をもっている。そこで、本研究では、地域社会の一員としての自覚に迫る子供の姿として、表1に示す四つを考えた。

地域社会の一員としての自覚が高まった状態の子供は「自分たちのまちは自分たちがつくっていることが分かり、地域社会の構成員として、よりよい地域社会を目指して地域の人々と共に生きていこうとする子供」である。このような子供を育てるには、自ら地域社会の成り立ちや仕組みなどをとらえるとともに、地域社会の課題に気づき、

表1 自覚に迫る子供の姿

地域の人々と心のつながりをもつ 同じ地域で暮らす人々が思っている地域のよさや、よりよい地域社会を願って改善したいと考えている地域の課題が、自分の思いや願いと共通していることに気付いている。
人の生き方に地域社会とのつながりを感じる 地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の努力や工夫が社会的事象としてとらえられ、人々の生活を豊かにしてきたことに気付いている。
生活の改善点を見いだす 日常生活の中で、自分がどんな努力や工夫をすれば地域社会の課題を克服し、よりよい地域社会が実現できるのか考えている。
地域社会へ参画しようとする 自分たちが考えた生活上の改善が、よりよい地域社会づくりにつながることに確信をもっている。

その解決を考えていく学習を展開することが必要である。そして、この学習を通して、同じ地域に暮らす人々と自分に共通する思いや願いを見いだしこと、地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の努力や工夫と現在の生活とのつながりをとらえること、自分の生活を振り返ること、地域社会への参画を考えることが大切であると考ええる。

(3) 出合いの活動について

地域社会の一員としての自覚を促すには、学習活動の中で地域の諸事象や地域の人々と繰り返しかわることが有効である。このことにより、子供たちは、地域の人々の思いや願い、努力や工夫などを具体的にとらえることができ、人の生き方に触れたり学んだりすることができる。また、地域や地域の人を身近に感じることができ、自分も地域の人々と共に地域社会をつくり上げていくことができる存在であることに気付くことができる。そこで、地

域社会の一員としての自覚を促す本研究では、図（p.59参照）のような出会いの活動を取り入れることとした。

2 研究の方法（p.66参照）

V 研究の展開

- 1 単元名 「多々良の大地をひらく」
- 2 単元の考察（略）
- 3 目標及び評価規準（略）
- 4 指導計画（18時間計画）（p.74参照）

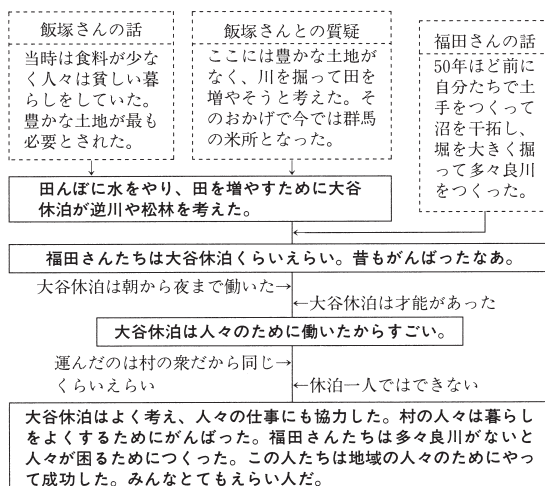
VI 研究の結果と考察

1（略）

2 郷土史家や多々良沼土地改良区の人話を聞き、先人の行動や考えに出会うことで、人の生き方に地域社会とのつながりを感じることができたか
児童は、郷土史家の飯塚さんと多々良沼土地改良区の福田さんから話を聞き、質疑を重ねた。その中で、松林や下休泊堀、多々良沼の干拓などについての学習課題を解決する

とともに、先人の営みに目を向けていった。そこで、開発に携わった先人の努力や工夫に触れた感想を取り上げ、「大谷休泊・村の衆・福田さんたちはなぜえらいのか」問いかけた。児童は活発に意見を交わし、先人の努力や工夫が人々の生活を豊かにしてきたことに気

資料1 Aの先人に対する考えの深まり



付いていった。

Aは、「休泊はなぜ逆川をつくったのか」という学習課題をもって話を聞き、資料1のように解決していった。二人の話や質疑を聞く中で、先人の営みへの関心が次第に高まり、休泊と福田さんたちの行動を比べていた。

そして、休泊に重きを置きながら、地域社会づくりへの努力に共通点を見いだした。その後の話合いでは、友達の意見を受けて、「休泊は人々のために働いたからすごい」と発言し、休泊の熱意に感心していた。さらに、友達の考えを取り入れ、それぞれの先人の業績について考えをまとめた。この活動から、Aは休泊や村人や多々良沼土地改良区の関係者の行いが地域社会づくりに役立っていることをつかむことができ、先人の生き方に地域社会とのつながりを感じることができたと考える。

3 (略)

4 多々良沼や松林一帯の在り方の提案について地域の人々の意見や感想を聞き、地域の人々の共感に出会うことで、地域社会へ参画しようとする気持ちをもつことができたか

多々良沼や松林一帯の在り方についての考えが近い友達とグループをつくり、自分たちの提案をパンフレットにまとめた。パンフレットは学習でかかわった地域の人々と市役所公園緑地課へ配布した。地域の人々から多くの意見や励ましが寄せられ、中には、子供たちに協力したいという声もあった(資料2)。パンフレットに對

する返事を読み合い、そして、公園緑地課の方と福田さんから直接意見を伺った。最後に「地域の人々の期待は何か」を問いかけ、地域の人々の意見や感想に対する考えをまとめた。

資料2 Aのグループへの意見や感想

地域の人々から	〈Aのグループ〉
・自分のごみは自分で持ち帰るという立て看板はよい	・えさやりはよい。他の公園に鯉のえさやり場があり楽しい
・えさやりはよい。他の公園に鯉のえさやり場があり楽しい	・もっと多くの人に楽しんでもらえるだろう
・もっと多くの人に楽しんでもらえるだろう	・近くに住む私も川の水を汚さないようにしようと思う
・近くに住む私も川の水を汚さないようにしようと思う	公園緑地課から
公園緑地課から	・ごみは持ち帰りが基本と考えている
・ごみは持ち帰りが基本と考えている	・水をきれいにするには一人一人の心がけが大切だ
・水をきれいにするには一人一人の心がけが大切だ	・人が来れば駅も大きくなりタクシーも増えるだろう
・人が来れば駅も大きくなりタクシーも増えるだろう	・売店やえさやり場を望む声が多くなればつくられるだろう
・売店やえさやり場を望む声が多くなればつくられるだろう	・そのままの方がいいという考えもある
・そのままの方がいいという考えもある	友達の発言
友達の発言	・えさやり場はない方がいい
・えさやり場はない方がいい	・白鳥と親しめるので必要だ
・白鳥と親しめるので必要だ	福田さんから
福田さんから	・きれいな沼をという気持ちに感心した。がんばってほしい
・きれいな沼をという気持ちに感心した。がんばってほしい	

Aのグループは、多々良沼の観光地としての活用をテーマに、自分たちでできることとして「白鳥のえさやり・ごみ拾い・町の人と一斉清掃」を、お願いとして「多々良駅とタクシー乗り場の改修・えさやり場設置・公園の出入り口や売店づくり・多々良沼の水質改善・ごみ捨て防止の立て札設置」を提案した。そして、多くの賛成意見とともに実現の難しさについての意見も寄せられた。Aは自分たちに

資料3 Aのまとめ

対する意見だけでなく、他のグループに対する意見や友達の発言にも着目していた。最後に、地域の人々や市から寄せられた意見から、資料3のように考えをまとめた。

ぼくは今まで「多々良の大地をひろく」でいろんなことを学習し、たけと太谷、休泊、森、福田、みづのつぎはぼくたちだと思い、パンフレットにいろんなことを書き、家の人に返事をかいてもらった。よんでみるとはげましがあたり注意があたり、きょうかよと書いてあたりてありうけつぎかでさそなをわづらえてきました。ぼくはこの学習をしてそういうことはむづかしいと思っていたけど、だんだんにみてようをこえそうになり、今まで一度もかりかんしたことのないことがいらいだのしそたも思いました。

この活動によって、Aは多くの困難を感じながらも、地域社会づくりに貢献した人々の後継者としての立場を意識し、地域社会づくりへの参画に期待感を高めたと考える。

VII 研究のまとめと今後の課題

- 出会いの活動によって、児童は、地域の多くの人々と交流でき、興味・関心をもちながら触れ合いのある学習活動を展開することができた。特に、人との出会いにおいては、その人の表情や動作などから、直接、気持ちや考え方などを感じ取ることができた。このような活動を通して、地域社会の発展に貢献してきた人や地域社会で生活している人の営みを、より一層共感的に理解し、同時に、自分もその地域社会で生活する一人であることに気付いていった。このことは、児童が地域社会を自分の生活の基盤としてとらえたことであり、地域社会の形成者としての自覚を促すことができたと考える。
- 出会いの活動は、学んだことを自分たちの生活に生かし、さらに、地域

の人々と一緒にによりよい地域社会の在り方を考えていくところに重点を置く。児童は、地域の問題には自分たち自身の生活に起因するものがあることを知り、自分たちの生活の仕方を変えようという意欲をもつことができた。また、地域社会への児童の提案から、地域の人々は、子供たちの新鮮な発想に喜びや驚きを感じ、子供たちの存在を改めて見直していた。このことは、地域社会に共に生きる仲間であるという意識をもち、進んで地域にかかわろうとする態度を育てる上で有効であり、これからも一層推進すべきであるとする。

- 出会いの活動は、地域の一人としての自覚に迫る四つの要素の育成をねらうものであるが、出会いの順序や組合せは取り上げる学習単位によって異なると考える。それぞれの単位における出会いの活動の組立て方について、今後も検討を重ねていく必要がある。

II 体験的な学習を取り入れた指導

◆ 実践例 2（授業研究）—小 4 国語—

本実践例は、経験したことを書く学習に「まんがシート」という体験的な活動を取り入れ、喜んで表現しようとする意欲を育てる「書くことの指導」の工夫をしたものである。具体的には、取材の過程において、材料を集める活動を通して中心点を明らかにし、構想の過程において、場面を組み立てる活動を通して伝えたいことがよく表せるような文章構成を工夫することで、子供一人一人が、自分の力で文章を書き上げる楽しさを実感できるよう指導を行った実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、目指す子供を明確にし、どのような手立てを設定するかである。

本実践例は、「喜んで表現する」という気持ちを、表現している様子や、完成させたことで得る成就感としてとらえ、自発的にしかも工夫を積み重ねることでもく書けるようになるという実感の得られる学習活動を設定した。また、子供の発達段階から考え、文章構成を「まんがシート」に順序を付けたり仲間分けしたりできるようにしたことに意義がある。

喜んで書く子を育てる書くことの指導

—取材、構想過程に「まんがシート」を取り入れて—

I 主題設定の理由

(前略)

子供たちは、話すことに比べて書く活動をあまり好まず、その内容は事柄のつながりや時間の流れに飛躍や乱れのあるものがみられ、せっかくの貴重な楽しい体験や発見などの経験が適切な方法によって十分に表現されないことも見受けられる。それは、従来の指導において「何を書いたらよいのか」「どのように書けばよいのか」という点における指導が十分ではなかったからではないかと考える。

書くことの指導においては、子供自身が書くことを見付け出し、相手に伝達する喜びを感じて意欲的に表現活動に取り組めるようにすることが大切ではないかと考えた。そのためには、子供たちが、たくさんの楽しい体験の中から自分の最も伝えたいことを見付け出し、焦点化し、事柄の順序を整理して相手に伝えられれば、表現したいという欲求が文章という形になってまとまりをもって伝達され、書くことの喜びを感じることができるのではないかと考える。(後略)

II 研究のねらい (p.37参照)

III 研究の見通し

- 1 取材の過程で、印象に残った場面を「まんがシート」に書き留める活動を取り入れれば、材料を集める楽しさを感じながら伝えたいことの中心を焦点化することができるであろう。
- 2 構想の過程で、書き留めた「まんがシート」の順序を入れ替えて文を組

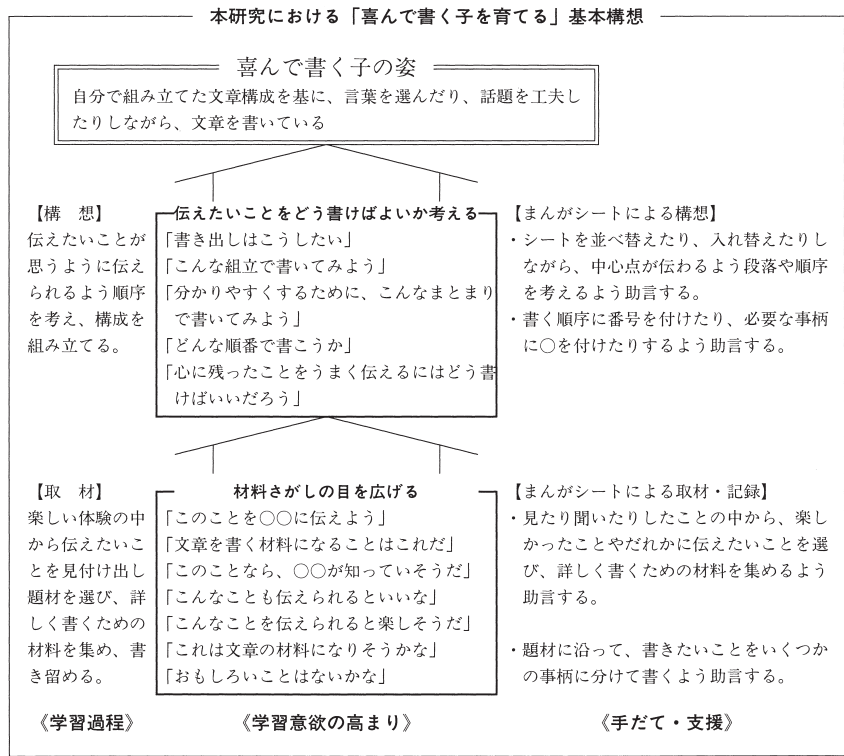
み立てる活動を取り入れれば、場面を組み立てて構成する面白さを感じながら、段落と段落の続き方を工夫した文章構成を考えられるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 喜んで書く子とは

「喜んで書く子」とは、書くことが楽しいと感じたり、自分の思いや気持ちを相手に伝えようとするとき、自分の考えや経験したことを振り返ってみようとしたときに書くことは役に立つと感じたりするということに、表現の過程や完成に成就感を得、伝えたいという思いを言葉や文章で表現することを楽しんでいる姿ととらえたい。



(2) 「まんがシート」を取り入れた意義

喜んで書く子を育てるには、表現活動に親しみをもって自発的に書こうとする意欲を育てることが大切である。そのためには、子供自身が「書く材料はどこにでもある」、「書く機会はいつでもよい」、「自分の思っていることを表現するのは楽しいことだ」、「書くことを積み重ねていけば、自分もうまく書けるようになる」、という実感を味わえる学習活動を工夫する必要がある。それとともに、「何のために、何を材料として、どういう計画で書くのか」という目的や方法を明確にしておく必要がある。そこで、日常生活で慣れ親しんだまんがの手法を用いた構成表を使って文章を書く活動を考えた。

「まんがシート」とは、1枚のシートに、「したことや見たこと、人の動きを絵や符号や記号、話したことや思ったこと」を吹き出しや文で表し焦点化していくものである。これは、子供たちが親しんでいる、1コマのまんがに当たる。1枚1枚を取材メモに使い、これを組み合わせることで構想メモとして使うことができるのである。

体験したことを思い起こすときには、まず、一瞬の場面を頭に思い浮かべ、その時の行動や気持ちを言葉でなぞっていく。この経験を文章に表すときに、「まんがシート」に描いた絵や吹き出しを手がかりにすれば、書くことが容易になる。多くの子供が「これならきっと書ける」という意欲や、「どう書けばよいか」という表現の仕方について見通しをもつことができるのである。子供たちは、学習の筋道が見えることで主体的に表現活動に取り組もうとするであろうし、シートを並べ替えたり、組み替えたりしながら、文章全体の構成や構造を視覚的にとらえることで、全体を見通した文章を組み立てる力を養うことができる。しかも、1コマごとに書く事柄を整理することができるので、中心点をはっきりさせ、段落と段落の続き方をとらえて表現するのに有効である。そのうえ、このような一連の書く活動を、子供が自分の力でやりとげるよさを実感できる。

以上のことから、「まんがシート」を組み合わせる文章構成を工夫することは、喜んで書く子を育てる書くことの指導を行うために価値あることと考

える。

2 研究の方法 (略)

V 研究の展開 (略)

VI 研究の結果と考察

- 1 取材の過程で、経験したことから印象に残った場面を選び、「まんがシート」に書き留める活動を取り入れたことで、書く材料を集める楽しさを感じながら伝えたいことの中心を焦点化することができたか
(前略)

生活の中で心に残ったことや文章に書きたいと思ったことを、題材集めのための「まんがシート」に記録し、その中から一番伝えたいことを選んで、詳しく書くための材料を集める学習を行った。まず、1枚のシートに、したことや見たことや思ったことを絵や文や吹き出しや符号などで書き表すよう助言した。Aは「遠足」という題材で、見晴らし台でのこと、散策コースの小さなあな、展望台が見えてきた、バスの中でのこと、と経験したことを4枚のカードに絵や吹き出しや文で書き留めた。これを基に詳しく作文を書いていくには何を中心にして書いていけばよいのか考えられるよう、シートにメモした事柄の中で最も言いたいことに◎を付けるよう助言した。Aは、資料1のように見晴らし台でのことの中の「みはらしだいは高いとここからすずしかった」を中心点に選び◎を付けることができた。

これらのことから、まんがシートを取材に使うことで、経験したことから書きたいことを選び出すことが容易になり、また、絵や吹き出しなどで表すことで、これを手がか

資料1 Aのシート1



りにして事柄を思い出してメモすることができ、さらに、楽しみながら材料を集める過程で一番言いたいことを明らかにすることができたと考える。

2 構想の過程で、「まんがシート」に表した材料を順序を入れ替えて文を組み立てる活動を取り入れることで、場面を組み立てて構成する面白さを感じながら事柄の順序や段落と段落の続き方を工夫した文章構成が考えられたか

(前略)

一番言いたいことが読む人によく伝わるような文の組み立てを考える学習を行った。まず、取材のための「まんがシート」に書かれているものの中で不要なものは省き、どんな順序に書いていくか番号を付けた。Aは、4枚のシートを読み直して3枚にし、資料1のように必要な事柄とそうでない事柄を区別するために文頭に○×を付けたり、＝で消したりした。また、資料2のように、吹き出し

資料2 Aのシート2



によってその時の気持ちを書き出した。そして1枚のシートに書いた事柄に順序を付けた。次に、それぞれのシートを並べ替えて文のまとまりと書く順序を決め、「1 みはらし台でのこと、2 さんさくコースの小さいあな、3 てんぼう台がみえてきた」というように、場所と時間の流れに沿って順に番号を付けた。このように、最も伝えたいことをどの部分に位置させればよいかを考え、全体の組立てを工夫することができた。

これらのことから、構想の過程で、「まんがシート」に表した材料を順序を入れ替えて文を組み立てる活動を取り入れることで、場面を組み立てて構成する面白さを感じながら、事柄の順序や段落と段落の続き方を工夫した文章構成を考えることができたといえる。

VII 研究のまとめと今後の課題 (略)

◆ 実践例 3（授業研究）—小 5 図画工作—

本実践例は、小学校高学年における鑑賞指導において、美術作品の特徴をまねて描く活動を通して、一人一人が自分なりの見方に基づいて美術作品に親しめるようにしたものである。具体的には、美術作品の特徴をまねて描いたりすることにより、美術作品の特徴に気付いたり、その特徴を体験的に感じ取ったりしながら、美術作品に対する見方や感じ方を深めようとした実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、研究仮説の有効性を質的な変容から検証していくことである。

本実践例は、基本構想図で具体的な子供の姿を明確に示している。検証においては、手だてとして具体化した活動において、子供が作品にどのように取り組んだのかを表に整理したり、観察に基づいて子供の考え方を記述したりしながら、子供の変容をとらえていることに意義がある。

美術作品に親しむ指導の工夫

—作品の特徴をまねて描く活動を通して—

I 主題設定の理由（略）

II 研究のねらい（p.37参照）

III 研究の見通し

- 1 美術作品を、色・形・モチーフなどの観点で比較し仲間分けを行えば、それぞれの作品の特徴に気が付き、興味・関心をもつことができるであろう。
- 2 気に入った美術作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作すれば、基にした作品の特徴を体験的に感じ取り、見方や感じ方を深めることができるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 美術作品に親しむとは

美術作品に親しむとは、美術作品の特徴などに気付いていくことにより、美術作品に興味・関心をもち、自分なりの見方や感じ方を深めていくことである。子供たちは、様々な美術作品に触れたり美術作品を比較しながら見たりすることで、それぞれの作品の特徴に気付き、興味・関心をもつことができるであろう。また、友達の多様な見方や感じ方に触れたり表し方をまねたりすることによって、初めに自分が美術作品に対して抱いていたイメージや初めて美術作品と出会い、受けた印象などとは違ったよさなどを発見し、美術作品に対する自分なりの見方や感じ方を深めることができるであろう。本研究における「美術作品に親しむ」とは、生涯学習における鑑賞活動の基盤を作ることであり、子供たちが、生涯にわたって美術を愛好し、気軽に画集を広げたり、美術館に自ら進んで足を運んだりできるようになることへ発展していくための基盤であると考えている。

(2) 美術作品の特徴をまねて描く活動の基本的な考え方

ア 美術作品の仲間分け

美術作品の仲間分けとは、様々な美術作品の共通点や違いを比較することにより、それぞれの作品の特徴に気付いていく活動のことである。最初に、作風の異なる印象の作品から共通点を探し、次に、共通点のある作品から違いを探し、一つ一つの作品独自の特徴について考える活動を設定する。このような活動により、子供たちは、初めの見方とは異なる観点から作品を見るようになり、多様な観点から美術作品の特徴に深く迫ることができると考える。子供たちは、この仲間分けの活動に友達と一緒に取り組むことにより、自分だけでは気付けなかった美術作品の特徴に多く触れることができ、作品に対する興味・関心を高めることができると考える。

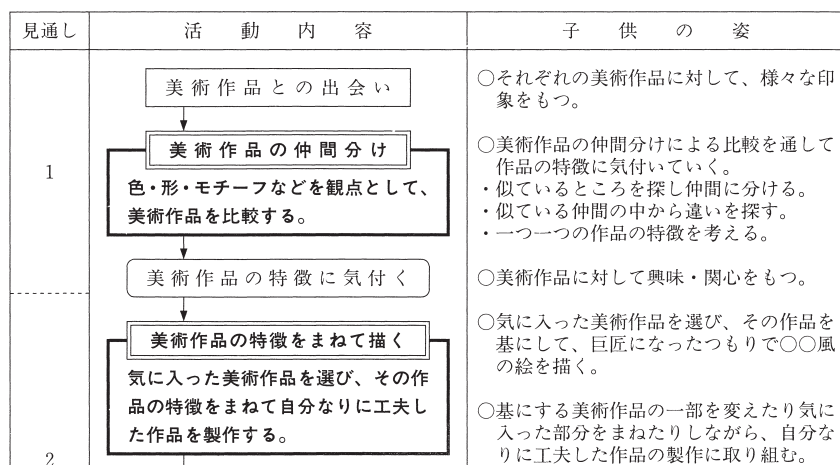
仲間分けの対象となる美術作品は、子供たちに知名度の高い作家の作品を中心に、表現の特徴が顕著なものを取り上げる。本研究では、子供たちが、

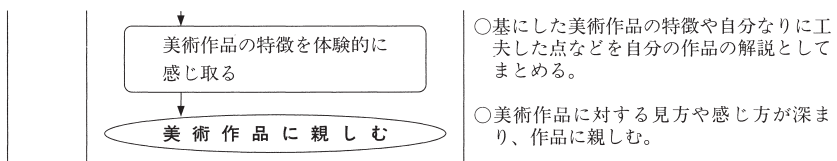
色・形・モチーフなどの観点を基にして、特徴が比較できることに配慮しながら、子供たちへのアンケート結果を基に、8点の美術作品を選定した。

イ 美術作品の特徴をまねて描く活動

美術作品の特徴をまねて描く活動とは、気に入った美術作品の特徴をとらえて自分なりに工夫した作品を製作することにより、見方や感じ方を深めていくものである。いわゆる「○○風」(例 ピカソ風)に描くことで、基にする美術作品の一部を変えたり、気に入った部分をまねたりしながら製作し、作品の特徴を体験的に感じ取ることによって、特徴をとらえた見方や感じ方を深めていくことを目指している。美術作品の特徴をまねて描く活動自体は、表現の活動であるが、活動そのものの中に作品の特徴をとらえ生かす要素を含んでいる。従って、美術作品の特徴を体験的に感じ取る能動的な鑑賞活動が可能になると考える。本研究では、模写のように画面を忠実に再現する高度な技術を求めるのではなく、小学生でも楽しめるように配慮して、作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作するようにした。最後に、活動を振り返り、基にした美術作品の特徴や自分なりに工夫した点などを作品の解説としてまとめる。

(3) 研究の基本構想図





2 研究の方法（略）

V 研究の展開

1 題材名「ピカソなわたし」（5年）

2 題材の考察

本題材は、美術作品の仲間分けによる比較を通して、それぞれの作品の特徴に気付き、その中から、気に入った美術作品の特徴をまねて作品を製作することにより、作品に対する見方や感じ方を深めていくものである。鑑賞する美術作品は、ピカソやムンクなどの作品で、特徴の違いが顕著なものを対象として取り上げる。それぞれの美術作品の特徴に気付くことにより美術作品に対する興味・関心が高まり、さらに友達の見方や感じ方に触れたり、体験的に作品の特徴に気付いたりすることで、見方や感じ方が深まっていくと考える。

3 目標及び評価規準

(1) 目標

美術作品の仲間分けや美術作品の特徴をまねて描く活動を通して、それぞれの作品の特徴に気付いたり体験的に感じ取ったりすることにより、美術作品に対する興味・関心を高め、見方や感じ方を深めることができる。

(2) 評価規準

- 美術作品の仲間分けや特徴をまねて描く活動に、興味・関心をもち、進んで取り組もうとする。〈関心・意欲・態度〉
- それぞれの美術作品の特徴に気付いたり体験的に感じ取ったりして、作品の特徴を自分なりに説明できる。〈鑑賞の能力〉

4 指導計画（全4時間）

時間	学 習 活 動	学習への支援及び配慮事項	見通し	評 価 項 目
1 ・ 2	○美術作品に関するクイズに取り組む。 ○美術作品に出会う。 ○美術作品の仲間分けを通して、それぞれの作品の特徴に気付く。	○身近な美術作品を使い、仲間分けに関連したクイズを提示することにより、作品を見ていく観点を意識できるようにする。 ○それぞれの美術作品から受ける印象を大切にするために、作品を1点ずつ展示するようにする。 ○美術作品の特徴に深く迫れるように、活動の流れを次のように設定する。作風の異なる作品から共通点を探す。→共通点のある作品から違いを探す。→一つ一つの作品独自の特徴を考える。 ○仲間分けの活動が深まるように、必要に応じて、画家や表現意図などについて、補足説明をする。	見通し1	○美術作品の仲間分けの活動に意欲的に取り組んでいる。 【関心・意欲・態度】 ○美術作品の仲間分けにおいて、自分なりにそれぞれの作品の特徴に気付いている。 【鑑賞の能力】
3 ・ 4	○気に入った美術作品を選び、その作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作する。 ○自分の作品の解説を書く。	○見通しをもって製作に取り組めるように、美術作品の特徴を振り返るようにしたり、作品の特徴をまねて描いた参考作品を提示したりする。 ○どの子も美術作品の特徴をまねて描けるように、個に応じて表現の仕方や見方などを助言していく。また、塗り方などを演示したり友達との交流を促したりする。 ○多様な見方や感じ方、あるいは表現の特徴などに気付けるように、基にした美術作品の特徴や自分なりに工夫した点などを作品の解説としてまとめ、まねて描いた作品と共に展示する。	見通し2	○基にした美術作品の特徴を自分なりに説明できる。 【鑑賞の能力】 ○美術作品の特徴をまねて描く活動を楽しんでいる。 【関心・意欲・態度】

VI 研究の結果と考察

1 美術作品の仲間分けによる比較を行ったことは、それぞれの作品の特徴に気づき、興味・関心をもつことに有効であったか

8点の美術作品を見た子供たちは、それぞれの美術作品に対して、全く異なった印象を受けたようであった。そこで、「全く違うように見える美術作品でも、実は似ているところがあります。どこでしょうか」という投げ掛け

資料1 仲間分けにより子供たちが見付けた美術作品の特徴

①ピカソ 『ドラ・マールの肖像』	②ゴッホ 『自画像』	③マグリット 『大家族』	④東洲斎写楽 『三世大谷鬼次 奴江戸兵衛』
何かしている感じ 顔の色がちがう 室内 だれかを見ている 人物画 服の色と形がいろいろ 髪の毛の色がいろいろ 色が派手 手が大きい カクカクしている	筆づかいが細かい 何かをにらみつけている 顔の色がいろいろ バックがぼやけている だれかを見ている 室内、人物画 メラメラしている においがしてきそう 棒の形の線でぬっている 肌の色がいろいろ	暗い（黒） 空（明るい色） 動物（鳥）が描かれている 空は晴れているのに、 バックは曇っている 切り取った形（鳥） 時間を表している	何かしている感じ 何かをにらみつけている 大きい顔 色（混ぜていない） だれかを見ている 肌の色がいろいろ 室内、人物画 黒い色が多い 手が大きい 髪の毛の色がちがう
⑤シャガール 『私と村』	⑥ダリ 『記憶の固執』	⑦ムンク 『叫び』	⑧マティス 『切絵紙ジャズ』よりサーカス』
人（大と小）が描かれている 逆さまの人がいる 色（派手） 大きい顔 バックの色（夜） 動物が描かれている 暗い	形がはっきりしている 暗い（黒） 動物みえないもの 空（明るい色） 時計（つぶれている、 とけている） アリやハエが描かれて いる	筆づかいが細かい バックがぼやけている だれかを見ている 人（まがっている） 暗い（黒） 色が薄い 夕焼け（明るい色） 棒の形の線でぬっている 表情	形がはっきりしている 直線 色（混ぜていない） 室内 人を小さく描いている 明るい色 人が黒色である 色が濃く、派手 細かくかいていない

から、仲間分けの活動を始めた。子供たちは、それぞれのもつ観点などを基に、各美術作品の似ているところ（共通点）について考え、美術作品に対する自分なりの見方や感じ方を発表した。「作品⑥と⑧は形がはっきりしている」「作品②と⑦は筆づかいが細かい」というように、2作品の共通点を指摘するものが多かった。それらの子供たちなりの見方や感じ方を、それぞれの美術作品の特徴として書き留めていった。

その後、「もっとたくさんの作品に共通する特徴はありますか」という投げ掛けにより、「作品③と⑤と⑥と⑦は明るい色が使われている」などの意見が出された。次に、「分けた仲間の中で考えましょう」と投げ掛け、同じグループの中で、それらの違いを見付けることに目を向けた。人がモチーフになっている作品（①、②、④、⑤、⑦、⑧）とその他の作品（③、⑥）に分けて、それぞれのグループの中から、色の感じや塗り方の特徴、人物の大きさ、画面への入れ方などについて違いを見付けていった。

最後に、美術作品の特徴に、資料2 仲間分けの活動における子供たちの主な意見

より深く迫るために、それぞれの作品独自の特徴について話し合った。「それぞれの美術作品には、他にどんな特徴がありますか」という投げ掛けから、子供たちは資料2のような意見を発表した。

H男は、美術作品と出会う

作品	意見	意見の根拠となる表現
②	メラメラしている	何かをにらみつけているような視線 服からバックにかけての力強い筆跡
③	時間（の経過）を表している	曇った空（現在）は鳥の形に切り取られて晴れた空（過去）がのぞいている
⑦	棒の形の線でぬっている	太い筆跡がわかるように描かれた線が塗り重ねられている
⑧	色が濃く、派手	純色を使った色彩、補色による配色
	人が黒色である	人物を黒一色で表現（シルエット）

段階で、それぞれの作品から強い印象を受けた。特に、作品②と⑦の人物が心に残ったようで、この二つの作品を特によく見ていこうと思ったそうである。「もっとたくさんの作品に共通する特徴はありますか」という投げ掛けに、資料3のような意見を発表していった。日ごろの授業であまり挙手することはないH男であるが、この授業では、色の使われ方や人物画の構図などに着目しながら作品の特徴を

資料3 H男が発表した美術作品の特徴

とらえ、積極的に発言していた。特に、自分の仲間分けの活動の中では、必ず作品⑦を選んでいたので、作品⑦

特徴	特徴の共通する美術作品
明るい色	作品③の鳥の形をした晴れた空 作品⑥の背景の晴れた空 作品⑦の赤く焼けた空
だれかを見ている	作品（①、②、④、⑦）

に対する興味・関心をもち続けていたことがうかがえる。

このように、美術作品の仲間分けによる比較を行うことで、それぞれの作品の特徴に気付き、興味・関心をもつことができたと思われる。

2 気に入った美術作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作したことは、基にした作品の特徴を体験的に感じ取ることができ、見方や感じ方を深めることに有効であったか

美術作品の仲間分けの後、「巨匠になったつもりで、〇〇風の絵をかいてみよう」という投げ掛けから、子供たちは、基にする美術作品を選び、どんな絵を描くか考え始めた。まず、教師が提示した参考作品 くピカソ風クラス

の友達〉を基に、作品の特徴をとらえてまねて描く活動のイメージをつかんだ。そして、選んだ美術作品ごとにグループに分かれ、基にする美術作品の一部を変えたり、気に入った部分をまねたりしながら製作に取り組んでいった。最後に、〇〇風の絵を描く活動を振り返り、基にした美術作品の特徴や自分なりに工夫した点などを、自分の作品の解説としてまとめた。

H男は、基にする美術作品として、仲間分けの活動で、興味・関心を持ち続けることができた作品⑦を選んだ。作品⑦を見ていると、人が牧場で牛に追われてびっくりしている様子が思い浮かんだ。そこで、テーマを「牧場」にしてムンク風の絵を描くことにした。作品⑦の特徴を「体などが曲がっている」「棒の形の線でぬっている」「薄くぬっている」ととらえ、その特徴をまねするように心掛けた。画面には、作品⑦のような象徴的な人物と牛を大きく描いた。バックの牧草地を、仲間分けの活動の時に、自分なりにとらえた作品⑦の赤く焼けた空の「明るい色」になるように淡い緑色で塗った。人物や川や小屋などは、棒の線（太い筆で描く線）を使って塗り重ね、色の感じや曲がった形を表すことができた。



しかし、基にした作品⑦の全体をつらぬくようなゆがんだ線の感じはうまく表現できなかった。そこで、「もっと作品を近くでよく見てみよう」と助言した。H男は、画面を食い入るように見つめ、絵の具の上にクレパスで引かれたような曲がった

図1 H男の作品「ムンク風の牧場」

線がところどころに描かれていて、それらが流れるように長くつながっていることを見付けた。そこで、塗り重ねた絵の具の上に、白や黒の色鉛筆で、川や人物などの輪郭と輪郭をつなげるように何本も線を描いていった。すると、全体をつらぬくようなゆがんだ線の感じがようやく表れてきた（図1）。また、薄い色を何度も塗り重ねたり、濃く塗られた色を薄くしたり、にじませたりしながら、作品⑦特有の深みのある、にぶく暗い色に近付けるような

取組がみられた。このように、近くで作品⑦を観察したり実際に色を塗り重ねたりした体験から、暗い色でも明るい色でも、ただ暗い色を塗ったり明るい色を塗ったりしてあるのではなく、様々な色を塗り重ねて暗い感じ（画面の雰囲気など）を出していることに気付いた。

以上のことから、H男は、基にした作品⑦の特徴を体験的に感じ取り、色を表す技法に関する見方や感じ方を深めることができたと思われる。

VII 研究のまとめと今後の課題（略）

* * *

◆ 実践例 4（教材開発研究）—中 1 理科—

本実践例は、生徒自身の観察から、惑星の公転軌道を求め、太陽系の空間的な奥行きや広がり方を推察するための教材を開発したものである。具体的には、惑星の形と太陽からの離角を用いて、地球からその惑星までの距離を計算し、公転軌道を作図で求めるという活動を取り入れている。そのために必要な条件を検討し、惑星までの距離を求めるためのコンピュータソフトを制作し、活用した実践例である。

教材開発研究において大切なことは、コンピュータを活用した教材を開発する場合、子供が簡便な操作で学習を行えるようにすることである。

本実践例は、シンボル操作による経験を促す教材を開発したものであり、観察を基に、地球と惑星との距離をマウスとテンキーだけの簡単な操作でとらえることができるコンピュータソフトを開発したところに意義がある。授業実践においては、生徒の観察、計算、作図という一連の活動から、惑星の公転軌道を求められるようにした。

観察から惑星の公転軌道を求める学習指導の工夫

I はじめに

中学校理科第 2 分野「地球と太陽系」では、惑星の動きを観察し、その観

察記録及び資料などに基づいて、惑星と太陽との見かけの位置関係を、太陽系の構造や惑星の公転と関連付けて、相対的にみる見方や考え方を養うとともに、太陽系の広がり認識することが求められている。

そのためには、日常生活において一般的なメートル単位の距離や広さなどを基準にする地球上レベルでの空間概念から、太陽地球間の距離を基準にする太陽系レベルでの広大な空間概念に尺度を変えて考えることが必要である。

しかし、生徒は、太陽系を含む広大な三次元的空間として、夜空を正しく認識しているとはいえず、惑星と恒星の間や惑星同士の間距離を、実際よりも小さくとらえてしまう傾向がある。そのため、惑星の公転軌道の広さや、公転による惑星間の距離の大きな変化を正しく理解できていない。

これらの原因としては、年間を通した惑星観察などの実体験に乏しい上に、探査機によって至近距離から撮影された大きく鮮明な惑星の写真や教科書の図、コンピュータによる仮想体験などによって、惑星そのものに関する詳しい情報は提供されているものの、かえって惑星は近くにあるといった誤った認識をもちやすいことが考えられる。また、今までの太陽系の構造や惑星の公転についての学習指導では、観察結果から各惑星までの距離の違いや公転の様子など、太陽系の空間的な奥行きや広がりについて推察することが難しいため、距離を極端に圧縮した図や模型を使用して、惑星の見かけの形が変化する原理を理解できるようにしていた。

そこで、生徒自身の観察を基に、地球から惑星までの距離や惑星の公転軌道を求め、太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察する学習指導の工夫が必要であると考え、そのための方法及び必要な教材を制作した。

II 研究の内容と方法

1 基本的な考え

惑星は太陽や地球との位置関係によって見かけの形が変化する。これを利用し、生徒自身による観察から惑星の公転軌道や太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察する学習手順を考案する。

体験重視の立場から生徒自身の観察結果を用いた手順とし、惑星と太陽からの離角を用いて、地球から惑星までの距離を求める。その際、難解な式による計算はコンピュータに行わせることとし、マウスとテンキーだけの簡単な入力だけから答えが表示されるコンピュータソフトを制作する。次に、求めた距離と太陽からの離角を用いて惑星の位置を作図する。このような観察と作図を期間をおいて繰り返し行っていくことで、惑星の公転軌道が作図されることになる。

これらの観察、計算、作図に、生徒一人一人が取り組むこととする。

2 惑星の位置を求め、公転軌道を推察する原理・方法

(1) 観察の対象となる惑星と時期

観察対象としては、大きく明るく見えることで観察しやすく、しかも公転速度が速い金星と火星が適している。その見かけの形の観察を基に地球からの距離の違いやその運動の様子(公転軌道)を見いだす学習を行うことにした。なお、惑星までの距離を求める活動では、内惑星と外惑星について、夜空のほぼ同じ位置に違った形として見える時期に観察することが効果的と考える。

(2) 惑星の輝面比と太陽離角から距離を求める原理

図1で α =太陽からの離角

i = 位相角

(各惑星から見た太陽と地球の離角)

なお、位相角は次の式で求める。

$$i = 180 - (\alpha + \beta) \quad \cdots \cdots (1)$$

k = 輝面比 (惑星像の、輝いて見える部分の、直径に対する比の値)

図2で輝面比は $k = \frac{n}{m}$

惑星面は、 $k = 1$ のとき全面が輝き、 $k = 0.5$ のとき半月状、 $k = 0$ のとき暗黒となる。

惑星の半径を1とすると $n = 1 - \cos(\alpha + \beta)$ だから、図1で輝面比と各角度は次式のような関係にある。

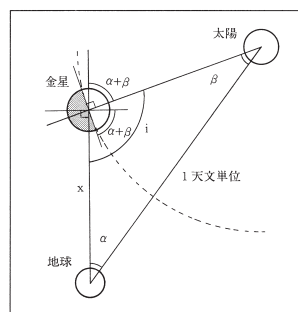


図1 角度と距離

$$k = \frac{1 - \cos(\alpha + \beta)}{2} \quad \dots\dots(2)$$

位相角 i は(1)と(2)から

$$i = 180 - \cos^{-1}(1 - 2k)$$

地心距離 x は

$$x = \frac{\sin \alpha}{\tan i} + \cos \alpha \quad \text{であるから}$$

$$x = \cos \alpha - \frac{\sin \alpha}{\tan(\cos^{-1}(1 - 2k))} \quad \dots\dots(3)$$

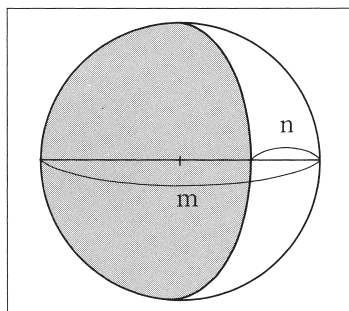


図2 輝面比

そこで、次の手順で、観察から惑星までの距離を知る。

- ① 太陽からの離角 α を観察により求める。
- ② 輝面比 k を観察により求める。
- ③ 地心距離 x を(3)の式で α と k から求める。

(3) 惑星位置の作図までの手順

西の空のほぼ同じ位置に接近して見える金星と火星の形の違いは、地球からの距離の違いによることに気付くよう、次のような学習の手順を考えた。

- ① 昼間、望遠鏡で金星を観察し、太陽からの離角を測定する。
- ② 日没後、西の空で互いに接近して見える金星と火星の見かけの形を観察する。

このとき、火星も金星とほぼ同じ位置に見えることから、太陽からの離角もほぼ等しいことになる。

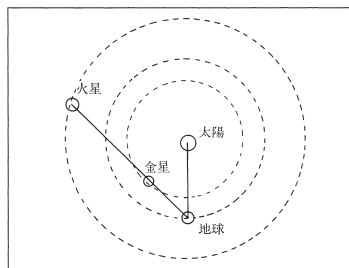


図3 各惑星の位置(1997.10.29)

- ③ 大型望遠鏡を使い、ビデオで撮影した金星と火星をそれぞれモニターに提示する。気流が安定しているときは、①や②の観察で見かけの形も確認できるため、この③は不要になる。
- ④ 惑星の見かけの形と、昼間測定しておいた太陽からの離角とから、コンピュータを使用して惑星までの距離を求める。

⑤ 太陽、地球の位置を基準に、惑星の位置を作画する。

3 教材の制作

(1) コンピュータソフトの制作

惑星の形と太陽からの離角を用いて、地球からその惑星までの距離を求めるために、生徒一人一人がコンピュータを使って計算する。そのためのソフトを、Visual Basic Ver.2 (Microsoft) で制作した。ここでのコンピュータの位置付けは、自然を調べる活動を支援し、強化することを助ける道具とする。実際の操作はマウスとテンキーだけで行えるようにした。

コンピュータの画面には、輝度比 k を 0.05 から 1.00 までの 20 段階に分けた図が 20 枚表示される。それらの図には、 $i = 180 - \cos^{-1}(1 - 2k)$ で求めた位相角 i の値がそれぞれ対応している (図 4)。そのため、観察した惑星に一番近い形をマウスで選択することにより、そのときの位相角 i を入力したことになる。次に太陽からの離角 α をテンキーを使って入力することで、地心距離 x や 1 天文単位を 10cm としたときの作画上の長さが表示される (図 5)。

(2) ビデオ教材の制作

授業時に観察できない過去の資料については、金星や火星の見かけの形がモニターで判別できるよ

うに、群馬県総合教育センターの 40cm 反射望遠鏡に 25mm の接眼レンズを取り付け、拡大した画像をカラービデオカメラで撮影し、ビデオテープに記録し

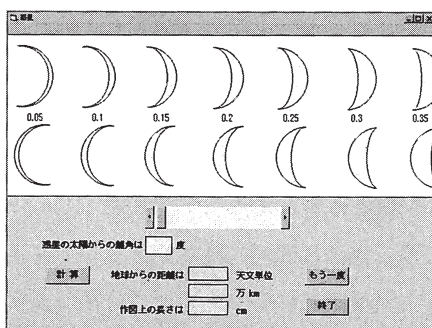


図 4 起動画面

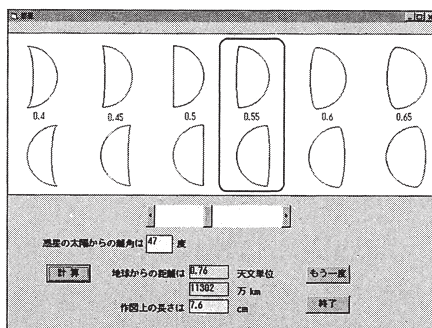


図 5 結果の画面

た。このビデオ教材を生徒に提示し、計算することで、惑星の位置や公転軌道の一部を作図によって求めるようにした。（後略）

4 精度の検討

本方法の精度に影響を与えると思われる要因についてそれぞれ検討した。

(1) 昼夜の観察条件による見え方の違い

金星の形を観察する場合、昼間は欠け際が見にくく、夜は背景が暗くなることで見やすい。これが輝面比の選択に影響を与えることが考えられる。具体的には背景が青空のときには、背景が夜空のときよりも欠け方が1段階程度大きく記録される場合がある。しかし、作図結果からみると多少円軌道がゆがむ程度の差であり、昼夜の観察条件による見え方の違いは大きな問題とはならない。

(2) コンピュータで図を選択する際の差

観察した惑星の形に近いものを、輝面比を20段階に表した図から選択する際に、実際の惑星の形と、選択する図の形との間に差が生じる可能性がある。これについて、以下のように検証した。

中学2年生の生徒に、惑星に似た1枚の図を見せ、輝面比によって20段階に分けた20通りの図（図6）から同じ形だと思えるものを選ばせたところ、8割以上の生徒は正しい輝面比の図を選択できた。残りの2割の生徒も1段階隣の図から選んだ。1段階隣の図とは、輝面比にして0.05の違いになるが、その結果としての距離の差は公転軌道を大きく変えるほどではない。これは誤答率の低さとともに、観察した惑星の形に近いものを図の中から選ぶ際に、生徒は十分正確に目測できることを示している。また、二つ隣の図を選ぶ生徒はいなかったことから、ここでは20段階の図を使用することにした。

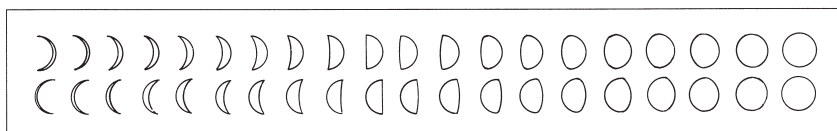


図6 20段階の図（左端が0.05 右端が1.00）

(3) コンピュータソフトでの計算上の精度

輝面比が0から1.00まで大きく変化する金星に比べ、火星の場合にはもともと変化の幅が0.88から1.00までと少ないため、コンピュータソフト上では0.85から1.00までの4段階程度の中から輝面比を選ぶことになる。そのため、金星に比べて火星の場合は距離についての誤差が大きくなる傾向がある。

図7は金星と火星について、1997年の輝面比と太陽離角の資料を基に本コンピュータソフトで計算し、その結果を基に作図したものである。図では、金星は内惑星、火星は外惑星ということを十分判断できる範囲に作図されている。

以上のような精度の検討結果から、金星と火星の公転軌道を求め、そこから太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察できることが確かめられた。

なお、本コンピュータソフトは、観察から距離を求めるために使用することを前提とし、対象となる惑星の太陽離角が10度以下になる

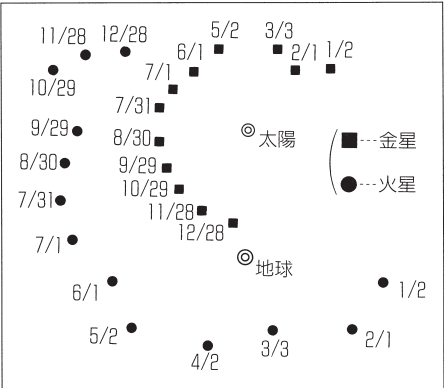


図7 資料を基に計算し作図した位置

ような、実際には観察が難しい状態や、実際の輝面比が0.99を超える時期の使用は想定していない。また、火星以遠の外惑星については輝面比の変化が極めて小さいため、本方法は適さない。

III 授業における活用

1 活用の視点 (p.100参照)

2 授業実践

(1) 授業のねらい

金星や火星の観察を行い、見かけの形の違いから、金星や火星の空間的な位置関係や公転の様子に気付き、太陽系の空間的な広がりを知る。

(2) 授業経過 (略)

(3) 学習活動の概要

ア 昼間の観察により、金星の見かけの形と位置(太陽からの離角)を知る場面

望遠鏡で金星を観察したときには、「月みたい」「白い」「欠けている」「三日月のように見える」などの発言があった。なぜ金星は欠けて見えるのかという問いに対しては、多くが「金星は月のように太陽の光に照らされている部分が白く見え、影になっている部分では見えない」と考えた。「地球の影になっている」と答えた数人の生徒には、球は光に照らされる方向により、違う形に見えることを模型で示し、惑星を空間に浮かんでいる立体としてとらえられるようにした。

輝面比については、授業当日の理論値は約0.5のところ、空が白っぽかったため欠け際が細く見える傾向にあり、0.4と0.45の2段階に分散していた。

太陽からの離角については、大型分度器とコンパスを使い測ってみせたことで、理解を容易にした。

イ 夜間の観察により、金星と火星の見え方の違いを観察する場面

金星については、「昼間見たものと同じだ」という発言とともに、「欠けている位置が違う」「昼間見たものより大きい」「昼間見たときは0.4だと思ったけど、夜は0.45に見えた」という発言があった。実際、半数近くの生徒は昼間よりも欠け方が少ない輝面比のものを選択し直しており、0.45から0.55の3段階に分散していた。

火星については「小さい」「金星より暗い」「丸い」「でも少し欠けて見える」などの発言から、形の判別には苦勞していた様子がうかがえるが、当日の輝面比0.93のところ、実際に多くの生徒が選択したものは輝面比0.9から1.00までに分散していた。

ウ 観察結果から、金星と火星の位置を求める場面

金星と火星は、ほとんど同じ位置に見えるのに、なぜ違う形に見えるのかという問いに対しては、「太陽の当たる角度」「惑星と太陽の位置」「距離の違い」といった3種類の答えがみられたが、この中でも距離の違いを意識して答えていた生徒は約35%と少なかった。

コンピュータで金星や火星の地球からの距離を求め、作図した結果、「金星と火星は大きく離れていたんだ」「火星が小さく見えたのは、金星よりも遠いからなんだ」といったつぶやきが聞こえた。

エ 観察結果から公転軌道を推察し、太陽系の空間的な広がりを知る場面

以前の位置についてもビデオ資料を基にコンピュータで計算し作図した結果、「金星は地球の内側を太陽を中心に回っている」「火星は地球の外側を回っている」「惑星はみんな太陽を中心に回っているらしい」などの発言がみられた。

3 結果と考察 (p.101参照)

IV おわりに (略)

III 個に応じた指導

◆ 実践例 5 (授業研究) — 中 3 数学 —

本実践例は、アイデアカードを活用して数学的な見方や考え方のよさを個に応じて感得できるようにしようとしたものである。具体的には、問題を解決するための方法と、それらを支える数学的な見方や考え方をアイデアカード化することにより、数学的な見方や考え方を認識できるようにした。さらに、アイデアカードを手がかりにして、それらを問題の解決に適用できるようにすることによって、数学的な見方や考え方のよさを感得できるようにした実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、目的と場面や方法とを関連付けて研究内容を具体化し、構想することである。

本実践例は、子供の実態に基づき数学的 5W1H の観点を構想し、問題解決的な学習過程に数学的な見方や考え方がとらえられるようにしたことに意義がある。

数学的な見方や考え方のよさを感得できるようにする指導の工夫
— アイデアカードの活用を通して —

I 主題設定の理由

数学科では、数学を進んで活用する態度を育てるため、数学的な見方や考え方のよさを感じ得るようにしていくことが重視されている。

今までにも、数学的な見方や考え方を育てるため、既習事項との関連を重視した学習を進めたり、多様な解き方のできる問題を提示して解法を比較検討したりする場面を設けてきた。これらの学習を通して、以前の学習を想起して似たような考え方で問題を解こうとしたり、一つの解法が得られても他の解法を考えようとしたりする姿が見られるようになった。しかし、そのような姿は、教師の具体的なヒントによって導かれることがほとんどであった。

そこで、このような状態を一步進め、新しい問題に直面したときに、以前に学んだ数学的な見方や考え方を進んで活用して、自分の力で問題を解決しようとする態度を育てたいと考えた。

そのためには、問題の解決で用いられる数学的な見方や考え方を認識できるようにするとともに、それらを他の問題の解決に適用できるようにすることが大切なのではないかと考えた。このことは、数学的な見方や考え方が問題を解決する上で有用であることを実感して、よさを感じ得し、数学的な見方や考え方を進んで活用する態度を育てることができるのではないかと考えたからである。そのための手だてとして、問題を解決するための具体的な方法とそれらを支える数学的な見方や考え方をアイディアカードにまとめることと、アイディアカードを手がかりにして問題を解決することを考えた。

以上のことから、アイディアカードの活用を通して、数学的な見方や考え方のよさの感得を図ろうと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

問題解決の場において、数学的な見方や考え方を認識するためのアイディアカードを活用していけば、自分の発想のよさに気づき、それを基に問題を自力解決していくようになるとともに、数学的な見方や考え方のよさを感じ得できるようになることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 問題を解決していくときの手だてを考える場面で、数学的5W1Hの観点に基づいてアイディアカードを作成していけば、異なる考えに触れたり、考えを深めたりすることができ、問題を解決するときに用いられる数学的な見方や考え方を認識することができるであろう。
- 2 認識した数学的な見方や考え方を基に、問題を解決していく場面で作成したアイディアカードを手がかりにしていけば、どのようなときにどのような数学的な見方や考え方が用いられるのかということに目を向けることができ、数学的な見方や考え方を問題の解決に適用することができるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 問題の解決における数学的な見方や考え方

本研究で取り上げる数学的な見方や考え方は、大別すると、問題を数理化するとき多く用いられる見方や考え方と、論理を構成する時に多く用いられる見方や考え方である。

問題の解決においては、様々な数学的な見方や考え方をを用いる。問題を解決することを目標とすれば、数学的な見方や考え方をを用いることは行動としてとらえることができ、その背景には動機となる事柄があると考え（図1）。

本研究では、この行動と動機を一体的にとらえられたとき、すなわち、数学的な見方や考え方とはどういうものか、それはどのようなときに用いられるのかということをとらえられたとき、数学的な見方や考え方を認識できたと考える。

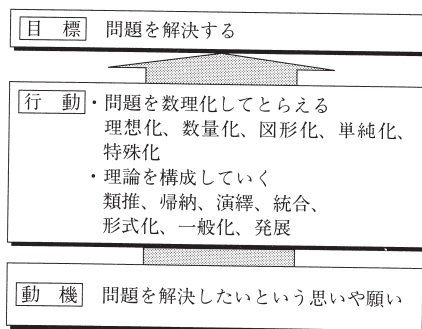


図1 問題解決における数学的な見方や考え方

(2) アイディアカードの活用と数学的な見方や考え方のよさの感得

アイディアカードとは、表側に問題を解決する時に用いた数学的な見方や考え方を短い言葉で書き、裏側に問題を解決するための具体的な方法を書くカードである。視点が明確になるように文章表現はなるべく短い表現にする。単純化、図形化などの分かりやすい言葉は、話し合いの中で提示していきたいと考えるが、カードに記入する言葉や文章は、生徒が考え、選んでいくようにしたいと考える。

表1 数学的5W1Hの観点と問題の解決の過程で現れる数学的な見方や考え方との関連

アイデアカードの活用		数学的な見方や考え方 のよさ（簡潔さ・明瞭さ・的確さ）の感得
解決過程	数学的5W1Hの観点	
問題を理解する	What 何が問題になっているのでしょうか	数学的な見方や考え方 の適用
計画を立てる	Where どこに目をつけたらよいのでしょうか How どのようにしたらよいのでしょうか	
計画を実行する	Why なぜそうしているのでしょうか	数学的な見方や考え方 の適用
振り返る	Who だれにでも分かるのでしょうか When いつでも成り立つのでしょうか	
数学的な見方や考え方の認識 カードの表側（数学的な見方や考え方） 「問題を数理化するときに多く用いられる見方や考え方」 分かっているものをはっきりさせる 求めるものをはっきりさせる（理想化） 数を使って表す（数量化） 図を使って表す（図形化） 簡単な数や場合に置き換える（単純化） 特別な場合を考える（特殊化） 「論理を構成するときに多く用いられる見方や考え方」 前と同じように考える（類推） 共通する決まりを見つける（帰納） 定理、性質を使って考える（演繹） 式から考える まとめて一つに表す（統合） 決まった形にまとめる（形式化） いつでも成り立つ決まりを考える 似た問題を考える（発展）（一般化） 条件を変えて考える 裏側（二次関数における具体的な方法） - 一緒に変化するものを見つける。 $y = ax^2$ の a に着目する。 $y = ax^2$ の a の範囲を正の数や負の数に限定する。 おおまかにみる。 y 軸に注目する。 数を使ったり、図形に表したりして分かりやすい形にしようとする。 点の間を滑らかな曲線で結んでグラフをかく。 - 表で表す（考える）。 グラフで表す（考える）。 $y = ax^2$ の a に簡単な数を代入する。 $y = ax^2$ の a を1として考える。 (0, 0), (1, 1) などの座標で考える。 原点の部分を拡大してみる。 - 比例や一次関数を基に考える。 $y = x^2$ のグラフを基に $y = ax^2$ のグラフの特徴を考える。 繰り返し測定して、決まりを見つける。 点を細かくとってグラフを正確にする。 点の値をいろいろと変化させる。 分類整理して表そうとする。 式を基に考える。 $y = ax^2$ の x^2 を X とみる。 文字を使って表す。 一次関数と比較してまとめる。 決まった形にまとめる。 解き方をまとめる。 特徴をまとめる。		

アイディアカードを活用するとは、アイディアカードを作成することを通して、問題を解決するときに用いられる数学的な見方や考え方を認識できるようにするとともに、アイディアカードを手がかりにしてそれらを問題の解決に適用できるようにすることである。

生徒は普段、あまり意識しないで用いている数学的な見方や考え方をとら

えるとともに、なぜ、そのような見方や考え方が問題の解決に適用できるようになるかを考える。そのようにすることで、それらの見方や考え方が問題を解決する上で有用であることを実感し、進んで活用しようとする態度となって現れるのではないかと考える（図2）。

したがって、本研究では、数学的な見方や考え方のよさを感得した生徒像を、「数学的な見方や考え方を認識し、進んで活用しようとする生徒」ととらえる。具体的には、問題を解決するときに、表1に掲げた数学的な見方や考え方をしようとする態度が見られる生徒を、よさを感得した生徒と考える。

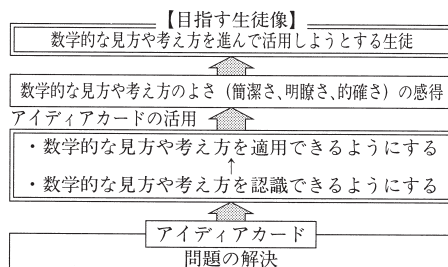


図2 研究の基本構想図

(3) 数学的 5W1Hの観点と問題の解決の過程で現れる数学的な見方や考え方との関連

本研究では、数学的な見方や考え方を問題の解決の過程との関連でとらえる。問題の解決のそれぞれの過程で多く用いられる数学的な見方や考え方と、問題を解決するための具体的な方法を二次関数の題材を例にして示すと、表1（前ページ）のようになると考える。数学的 5W1Hの観点は、数学的な見方や考え方や、それらに基づいた問題を解決するための具体的な方法に目を向けることができるようにするための発問である。それぞれの発問と数学的な見方や考え方との関連は、実線で結んだとおりである。

V 研究の展開（略）

VI 研究の結果と考察

1 学習問題を解決するときに、数学的 5W1Hの観点に基づいてアイディアカードを作成することを通して、数学的な見方や考え方を認識することができたか

(前略)

第1時には、カーテンレールの上を転がり落ちるビー玉の動きから二次関数を見いだす学習を設定し、数学的5W1Hの観点に添って、生徒の考えを引き出す授業を行った。「何が問題になっているのか (What)」「どこに目をつけたらよいのか (Where)」からは、「距離と時間に注目する」という考えを引き出し、「どのようにしたらよいのか (How)」の観点からは、「1秒間に進む距離を知る」「10秒間転がす」「決まりを見つける」「表に表す」「式に表す」等の考えを引き出すことができた。

表2は、A男のアイディアカードを、作成した順序にまとめたものである。最初は、友人と同じ表現を用いているが、次第に異なる表現を用い始め、最終的にはアイディアカードの内容、数とも異なったものとなっている。これは、最初は話を基に教師が板書した表現をそのまま書き写していたものが、次第に自分で考えて、

表2 抽出児A男が作成したアイディアカードの内容

数学的な見方や考え方をカード化するようになっていったためと考える。また、A男のアイディアカードは、似通った内容ごとに並べ替えられていた。これらのことは、アイディアカードの作成を通して、生徒の見方や考え方に対する認識が高

A	男
表側 (考え方)	裏側 (方 法)
実際にやってみる	10秒間転がす
問題のポイントを見つける	距離と時間に注目する
決まりを見つける	
応用する	式に表す
見やすく、分かりやすく、応用する	表に表す
比例をもとにして考えた	1秒間に進む距離を知る
比例として考えた	xが増えるときのyの増え方
比例の表と対比して考える	比例の表と対比して考える
条件をはっきりさせる	aを決める
a = 1だから分かりやすくなる	a = 1にする
細かく計算する	線は点の集まりだから
座標のとり方を工夫する	下半分は使わない
一次関数と比べる	yの増加量が一定でない
式で計算する	負の数を2乗すると正の数
式に当てはめてみる	$y = x^2$ のxを0にするとyも0

まっていったことの現れであると考え。(後略)

2 作成したアイディアカードを手がかりにして問題を解決していくことにより、数学的な見方や考え方を問題の解決に適用することができたか

(前略)

A男は、アイディアカードを導入した次の時間から、教師が発問をするたびに、アイディアカードをめくって考えていた。 $y = ax^2$ のグラフの性質

を個人で考える時間では、 a が負になるとグラフが x 軸よりも下になる理由を尋ねると、アイディアカードを見ながら「式に当てはめて計算する」と答えた。式に当てはめて計算するとはどういうことか尋ねると、「 x が -1 のとき、 y が -1 になって……」と答えた。

ここでA男は、式に当てはめて計算するという数学的な見方や考え方を先に述べ、後から $x = -1$ として、具体的な数値で説明を行っている。これは今までのA男には見られなかった発言の仕方である。以前のA男の発言は、

「 x の部分が -3 のときに 9 になるので、……」というように数値を用いた具体的な説明が中心であり、A男の思考の進め方に変化が現れたことが分かる。A男は、この後の授業でも、「校舎の距離を測って、速さは、式で、距離÷

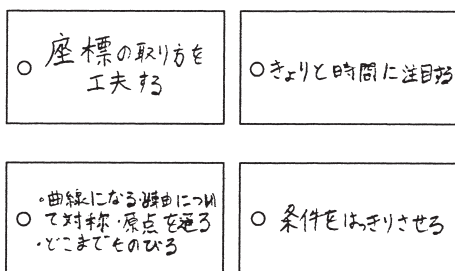


図3 A男のアイディアカード

時間で求める」と発言している。また、似通った内容のアイディアカードを、自発的に並べ替えていた。これらのことから、A男はアイディアカードを手がかりにすることにより、式に目を向けることができるようになり、演繹的に考えるという数学的な見方や考え方を問題の解決に適用することができるようになっていたと考える。(後略)

VII まとめと今後の課題

研究の結果、次のような成果と課題が明らかになった。

- 数学的5W1Hの観点は、問題の解決の過程に位置付けられていたため、問題を解決するための指針となり、生徒の考えを引き出し、異なる考えに触れることができるようにする上で、有効であった。
- アイディアカードを作成することは、問題を解決するための具体的な方法とそれらを支える数学的な見方や考え方を一体的にとらえる上で有効で

あった。また、アイディアカードに書き込むために、数学的な見方や考え方を短い表現にまとめることを通して生徒の考えが整理され、深まることが分かった。

- アイディアカードを手がかりにすることにより、普段、あまり意識しないので用いている数学的な見方や考え方を進んで問題の解決に適用することができた。そのことにより、数学的な見方や考え方が問題を解決する上で有用であることを実感し、よさを感じ得できたと考える。
- 生徒がアイディアカードに記入する表現は、生徒の言葉を生かすようにしたため、具体的で適用範囲の狭いものになりがちであった。他の単元での学習にも生かしていけるようにするためには、カードの枚数を増やしなから、「前と同じように考える」というような適用範囲の広い表現にまとめていけるような手だてを工夫する必要があると考える。

* * *

◆ 実践例 6（教材開発研究）—中 1 外国語—

本実践例は、生徒一人一人の英語による主体的な表現活動を促すために、「話す・書く」ことを中心としたプレゼンテーション支援教材を開発したものである。具体的には、生徒一人一人が自己紹介や身近な話題等について、マルチメディア機能を利用し、自分自身の声や写真等を取り込んで、既習英語で発表することができる教材を制作し、活用した実践例である。

教材開発研究を進める際に大切なことは、教材開発の構想である。

本実践例は、シンボル操作による経験を促す教材を開発したものであり、これは既習英語を用いて、繰り返し操作しながら、発表内容の構想を練ることができるように教材をパッケージ化しているところに意義がある。

授業実践では、この教材を活用することで、生徒が英語で伝えたいことを自ら見つけたり、分かりやすく表現しようと工夫したりするようにした。

英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫
ープレゼンテーション支援教材の開発とその活用を通してー

I 主題設定の理由

(前略)

英語を話せるようになりたいという気持ちとは逆に、実際の授業では「分からない、難しい、恥ずかしい、つまらない」という消極的な声が聞かれ、その工夫は容易ではない。生徒一人一人が自分なりの思いや考えを英語で表現することに興味をもち、主体的に取り組むような手だてが必要である。そして、「分かった、できた、おもしろい、もっとやりたい」という声が数多く聞かれるような表現活動の工夫をしなければならない。

この点で、学習への興味・関心や個別学習に有効な道具であるコンピュータの活用を考えた。つまり、コンピュータを使ったプレゼンテーションの手法を取り入れた自己表現活動を行うのである。文字・音声・画像等のマルチメディアを一人一人の生徒が簡単な操作で活用できるようにすれば、生徒は自分なりの思いや考えを英語で表現することに興味・関心をもつであろう。そして、分かりやすく伝えようとする主体的な表現活動も引き出すことができるのではないかと考えた。

また、国際化とともに情報化がさらに進展するにつれて、こうしたマルチメディアの活用によるプレゼンテーション能力の育成も必要になることが予想される。その点からもこの手だては意義があると考えた。

そこで、本研究では、コンピュータによる文字・音声・画像等のマルチメディア機能を使ったプレゼンテーション支援教材を開発し活用する。この実践によって、生徒は英語による表現活動に興味をもつとともに、主体的な表現活動に取り組むようになるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい (p.97参照)

III 研究の見通し (p.100参照)

IV 研究の内容及び方法

1 コンピュータを使った主体的な表現活動について

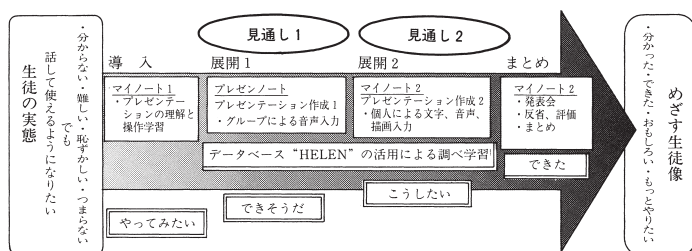
(前略)

本研究主題の英語による表現活動を、コミュニケーション能力の育成のために必要な「自分なりの思いや考え、伝えたいことを自ら見つけ、それを分かりやすく英語で表現しようとする生徒の主体的なプレゼンテーション」ととらえた。そのプレゼンテーション (presentation: 発表、提示、表現) とは、多様なメディアを活用し、言いたいことを相手に分かりやすく伝えたり、説明したりする発表活動である。その発表活動の手法を英語の自己表現活動として取り入れるために、プレゼンテーション支援教材を開発した。これを生徒が活用することで、自分自身の声と簡単な描画や写真による数画面のスキットを簡単に作成することができ、発表も行える。

このような表現活動を通して、生徒の「まちがえても安心、繰り返し何度でもできる、操作がおもしろい、もっとやってみたい」という意欲を高めるとともに、英語で伝えたいことを自ら見つけたり、分かりやすく表現しようとする工夫などの主体性を引き出したい。

2 プレゼンテーション支援教材の開発と活用について (p.97参照)

3 研究の構想図



4 授業実践

- (1) 実践計画 (略)
- (2) 検証計画 (略)
- (3) 抽出生徒 (p.200参照)
- (4) 生徒の実態 (37名)

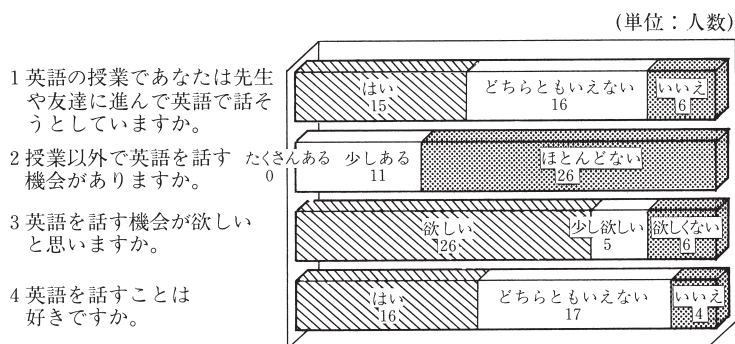


図1 英語を話すことについてのアンケート調査結果

「英語の授業では、進んで英語で話そうとしていますか (図1の1)」というアンケート調査をしたところ「はい (15人)」という意欲的な回答とともに、「どちらともいえない (16人)」というあいまいな回答も多かった。また、「英語を話すことは好きですか (図1の4)」という質問に対する回答もほぼ同じ結果だった。そして、どちらともいえない (17人) という回答の理由をまとめてみると、英語を話すことに対して「分からない、難しい、恥ずかしい、自信がない」であった。その反面で、7割近くの生徒は「英語を話す機会が欲しい (図1の3)」と答えている。これは、英語を話すことに対する自信のなさや苦手意識があるものの、話せるようになりたいという生徒の願いを表している。この点で、本研究の「英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫」に取り組み、改善すべき生徒の実態が本学級にはあると考えた。

(5) 指導計画

7 時間予定

教材 作業の流れ	時間	●学習の内容 ◎生徒の主な学習活動	★求める生徒の声 ■評価項目
導入	1	マイノート1 音声入力の操作練習 カード1 カード2 カード3 カード4 カード5 SAD ANGRY COLD HAPPY HOT ADDRESS HOBBY BLOOD FAMILY FOOD FATHER MOTHER Gfather Gmother SISTER GET UP BREAKFAST SCHOOL CLUB GO TO BED Sunday Monday Tuesday Wednesday Saturday ●ご機嫌いかが How do you feel today? とその応答文 ●私はだれ Who am I? と人物紹介 ●私の家族 My family 家族紹介 ●私の1日 A day 1日の生活紹介 ●曜日の紹介 A week 1週間の生活紹介	★「やってみたい」 (表現活動への興味・関心) ■コンピュータ操作に積極的に取り組んでいる。 ◎五つのプレゼンテーション紹介プログラムを視聴する。 ◎自由選択による紹介プログラム実行により、プレゼンテーションの流れと内容をつかむ。 ◎プレゼンテーション簡易作成 音声の入力(録音)を中心にした発話練習 ◎作成したプレゼンテーションのデモンストレーション
展開1	2	グループ 課題 スタートカード カード1 カード2 カード3 カード4 カード5 あいさつ 名前 家族、持ち物 好き、趣味 夢 あいさつスタート 名前スタート Haveスタート 趣味スタート 夢スタート あいさつ1 名前1 Have1 趣味1 夢1 あいさつ2 名前2 Have2 趣味2 夢2 あいさつ3 名前3 Have3 趣味3 夢3 あいさつ4 名前4 Have4 趣味4 夢4 あいさつ5 名前5 Have5 趣味5 夢5 ●あいさつ Greeting 様々なあいさつの仕方 ●名前 My name 自分の名前と愛称の言い方 ●持ち物 I have 家族や、自分の持ち物の紹介の仕方 ●趣味 I like 自分の趣味の紹介 ●夢 My dream 将来の夢について	★「できそうだな」 (プレゼンテーション作成の態度) ■友達同士の話合いに進んで参加している。 ◎五つのグループを作り、一つのグループが一つの課題についてのプレゼンテーションカードを作成する。 ◎選択した課題についての内容や構成をグループで相談する。そして、6枚のカード(スタートカード・カード・カード)を分担して仕上げる。
展開2	3	◎マイノート1にあるプレゼンテーションの例を参考に自分のプレゼンテーションを作成する。(個人又は2人1組程度で作成する。) 手順 ① 構想図を作成する。 英文、画像、スライドの流れを考える。 ② 文字・音声・画像データの作成及び編集 ③ 各データの貼り付け ④ 実行(デモンストレーション)・再編集	★「こうしたい」 ■自分自身の身近な話題を探し、分かりやすいプレゼンテーションを作ろうと工夫している。
まとめ	1	◎完成した作品を、生徒がそれぞれのコンピュータに移動しながら、互いに見合い、発表する。 ◎気付いたこと、参考になったこと等を相互評価と自己評価カードに記入して本題材のまとめをする。	★「できた」「もっとやってみたい」 ■友達の良いところを積極的に探し、理解しようとしている。

V 結果と考察

1 活動の概要

(1) 展開1について

プレゼンノート（紹介プログラム2）を使い、6～7人のグループに分かれてプレゼンテーションを視聴し、音声入力によるプレゼンテーション作成に取り組んだ。セリフの録音操作に苦勞する姿も見られたが、多くの生徒は録音した自分の声が聞こえてくると、「こんな言い方してた？」など、今まで気付かなかった点を発見したり、驚きの声をあげ、音声入力によるプレゼンテーションに興味を示すとともに、互いに聞き合い、工夫して自分なりのセリフを録音していた。そして、何回も録音したり、分からない単語の発音や意味を調べる姿が見られた。

(2) 展開2について

基本フォーマット（p.98参照）を使って、マイノート1を参考にした生徒一人一人のプレゼンテーションをするためのマイノート2の作成に取り組んだ。ここまでのプレゼンテーション視聴と音声入力による学習で操作に慣れたせいか、「おもしろかった」や「もっとやってみたい」という声が多く聞かれた。

(3) まとめについて

完成したマイノート2のデータをフロッピーディスク1枚にコピーし、それを交換し合いながら自由に友達のプレゼンテーションを視聴する発表会を行った。内容的には簡単な自己紹介や家族、友達紹介が多かったが、できるだけ多くの作品を見ようとデータを交換するために動き回る中で、言い方や工夫した内容についての生徒同士のやりとりが多く聞かれた。

2 学級全体の生徒について（略）

3 抽出生徒について

抽出生徒Aは友達3人と組んで、マイノート2（図2）の作成をした。主に2番目と5番目の描画とセリフを担当していた。「単語の発音や意味が分からないので難しい」と答えていたAだったが、“2 I like dog and cat.”と

いう単文の音声入力の場合では、発音やイントネーションなど、言い方や声の大きさを工夫しながら25回も録音・再生を繰り返し、それだけで20分間も取り組む姿が見られた。導入後の「難しいけど、おもしろい」や、まとめ後の「もっとやって

みたい、自分のプレゼンテーションを作りたい」というAの答えから、本研究のプレゼンテーション作成は、生徒の主体的な表現活動を引き出す効果があったといえる。

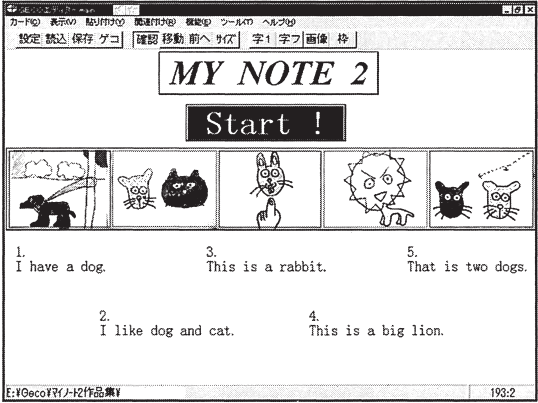


図 2 A の作品（スタート画面）

表 1 各学習段階における抽出生徒の意識の変容

	導入	展開 1	展開 2	まとめ（発表）
抽出生徒 A 英語の単語や発音が 難しいと感じている	・おもしろかった ・難しかった	・おもしろかった ・もっとやってみたい	・もっとやってみたい ・自分のプレゼンテーションを作りたい	・もっとやってみたい ・自分のプレゼンテーションを作りたい
抽出生徒 B 言いたいことがあっても 恥ずかしくて話せない	・おもしろかった ・自分のプレゼンテーションを作りたい	・おもしろかった ・もっとやってみたい	・もっとやってみたい ・自分には作れそうにない	・おもしろかった ・もっとやってみたい
抽出生徒 C 英語への苦手意識が強い	・難しかった ・わからなかった	・つまらなかった ・もうやりたくない	・難しかった ・自分には作れそうにない	・おもしろかった ・自分のプレゼンテーションを作りたい

「言いたいことがあっても恥ずかしくて話せない」という抽出生徒 B は、家族紹介のプレゼンテーションを一人で作成した。B は描画の作成は早かったが、セリフの音声入力では大きな声が出なくて録音に苦労していた。しかし、A と同様に繰り返し録音・再生し、英語のセリフに慣れるとともに、はっきりした声で話せるようになっていった。その結果、「みんなの前で言うのと違って何回も言い直しや工夫ができるので話しやすい」や「直接、人の前で話すのと比べて言いやすかった」という B の声が聞かれるようになった。

この点で、本研究で作成した教材は、進んで英語で話そうとする意欲の喚起に効果があったといえる。

抽出生徒Cは、Aと同様に3人で人気キャラクターの紹介プレゼンテーションを作成した。Cが担当したのは、2番目と4番目の描画とセリフであった。自分の分担の構想図がなかなかうまくできなかったので、Cが作業に専念できるように、コンピュータ1台を用意したところ、作品発表の当日まで努力し、ようやく完成させることができた。この最後の感想では、「おもしろかった」や「自分のプレゼンテーションを作りたい」（表1）という学習への興味・関心を示す答えが返ってきた。

このような抽出生徒の学習の様子から、本研究で作成したプレゼンテーション支援教材による指導の工夫は、表現活動に対する興味・関心や主体的な学習を引き出すことに効果があったと考える。

VI まとめと今後の課題について（略）

* * *

◆ 実践例7（授業研究・事例研究）—中2作業学習（特殊学級）—

特殊教育において実践的研究を進める場合、授業実践を中心として研究を進める「授業研究」の側面と、ある特定個人の課題に応じて、その解決を目指した実践を中心として研究を進める「事例研究」の側面を併せもっているといえる。本実践例は、その前者である。それは、目指す資質や手だてが明確であるとともに、指導方法の工夫に視点を当てているからである。

本実践例は、生活経験や社会性に乏しく活動への意欲を長期的に持続させていくことが難しい知的障害のある生徒に対する指導である。作業学習の授業の中で、手順を踏んで木工製品を製作するなどの段階的・継続的な支援を取り入れたり、製品の販売先である地域の方との交流を深めたりする指導方法の工夫により、就労への意欲の芽生えをねらったものである。

授業研究を進める際に大切なことは、実態把握の段階で教師が生徒の思いや願いをくみ取ろうとする姿勢をもつことである。

本実践例は、今生徒が自信をもって取り組めることに着目したり、今苦手であ

ることにも授業の中でどのように支援すれば積極的に取り組めるようになるのかを十分に考えたりしながら、授業を展開しようと構想している点に意義がある。

知的障害のある生徒が自ら就労への意欲をもてるようにする指導の工夫

—作業学習における指導方法の工夫に視点をあてて—

I 対象生徒 中学校 2 年生 男子

1 生育歴及び家庭状況 (略)

2 学校での様子

学習面では、小学校 3 年生程度の漢字の読みや計算が、ほぼ確実にできる。作品作りなどの作業を主とした学習には、かなりの負担を要する作品でも粘り強く丁寧に仕上げる。

生活面では、当番活動に取りかかるとき、具体的な指示を受けたり、やり方を復唱、確認したりして安心感が得られると、自ら着手できることが多い。生活する範囲が限られていて、初対面の人物や初めて体験する事に対しては、極度な興奮や緊張が見られ、会話（特に構音）や動作がぎこちなくなってしまう。

進路に関する調査の回答では、自分の長所の 3 番目に作業学習で木工が得意なことを、短所の 2 番目に木工での取組が不十分な点を、身に付けたい力の 2 番目に、木工製品を売ることを挙げている。また、中学校卒業後の進路については、進学してやりたい勉強（絵や版画、木工、漢字）を続けたいことと、新聞配達所に就職したいことの両方の希望があり、どちらとも決めかねている。

3 諸検査の結果

- (1) 全訂版田中ビネー知能検査 精神年齢 9 歳程度 (詳細略)
- (2) 新版 S-M 社会生活能力検査 社会生活年齢 8 歳程度

身辺自立はほぼ十分であるが、移動や集団参加など生活行動面における体験が不足していると思われる。

(3) 企業就労を目指す生徒用自立度チェック表によるプロフィール分析

就労するのに必要と思われる

る能力、すなわち「身辺処理、作業能力、家事能力、学校での基本的課題」の評価が高い。「基礎学力、人間関係、生活・職業意識」などは、就労後も成長が期待できたり、環境さえ整っていれば他の能力で補ったりすることが可能である。

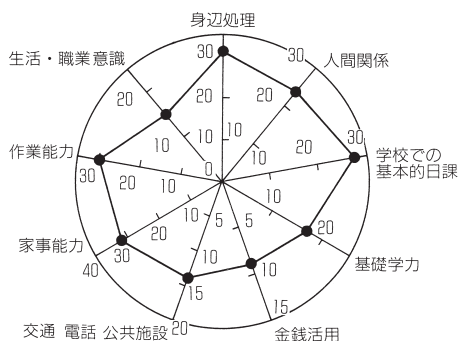


図1 プロフィールダイアグラム

本生徒の場合、基礎学力の不足は本人の努力や周囲の指導及び援助で、生活や職業への意識は、給料を手にして実生活を営む中で自ら高めていくことが十分可能であると考ええる。

しかし、人間関係、金銭の扱いや経済観念、公共施設の利用などは、適切な生活経験の積み重ねが極端に不足しているためか落ち込みが大きい。したがって、良識や節度ある交流活動を重ねて交友関係や社会的信用を築いていく能力や、お金を計画的に運用・管理していく能力、公共機関や施設、官庁等の働きを理解し、設備や制度を利用できる能力を伸ばさせていくことが課題であることが分かる（図1）。

II 研究のねらい

知的障害があり、生活経験や社会性に乏しく、活動への意欲を長期的に持続させていくことが難しい生徒に、「自分でも製品を作れる」という自信をもつことができ、就労に向けての意欲をもてるようにするには、作業学習においてどのように指導方法を工夫したらよいのか実践を通して明らかにする。

III 指導仮説

本生徒は、入学当初より絵画制作や木工品製作に段階を踏みながら慣れ親しんできた。絵画展で入賞したり、合同文化祭で実演即売をしたりした経緯もあり、それらに好んで取り組むようになった。

本生徒が、やる気をもって自ら行動を起こす時は、過去に何回も取り組んだ作業などに限られる。すなわち、明らかな見通しがもてたり、「失敗しないでやり遂げられる」という自信がもてたりする場合である。見通しがもてたとしても、より複雑な課題に対しては、失敗して意気消沈してしまうことが多く、課題解決まで長期的に意欲を持続させることができなかった。

この問題を解決するために、作業学習を出来ばえのよい「作品」作りから、消費者の要望に合わせた「製品」を生み出す学習へと発展させたい。それには、まず習作品を教師とともに作り、材料を自分で判断して購入する。次に販売を取り次いでもらうための交渉をし、消費者の要望や意見を製品に反映させて改良することができるように指導方法を工夫していく。それにより、やる気をもって製作活動や販売活動に取り組むことができ、目的や場面に応じた自己の表現方法や人とのかかわり方を知ることができるであろう。同時に、本生徒の活躍が周囲から認められるものとなる。その結果、自分でも製作し販売することができるという自信をもつことができ、就労することへの意欲をもてるようになるであろう。

1 指導方針

本実践では、具体的な指導の手だてとして、以下のことを重点化して行い、本生徒の変容を期待したいと考えた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 同じ人と繰り返ししかかわることができる場面設定を工夫して、適応性を高める② 作業習慣や手順、方法を効率化するための自己評価の工夫を図り、計画性を高める③ 消費者から改良点が直接伝わる機会を増やし、よい品を作ろうとする向上心を養う④ 自分の体調や防護具の状態を確認し、「安全第一」が励行できる作業習慣を養う⑤ 材料を無駄なく大切に使うなど、作業の手順や方法を改善する経済感覚を養う⑥ 工程を分担し、当番に交替で当たるなど、作業形態を工夫して、協調性を高める |
|--|

- ⑦ 簡単に正確な仕事ができる治具や補助具等の教材を工夫して、確実性を高める

2 指導上の留意点

- (1) 動力機具を積極的に利用するが、生徒の安全確保を最優先し、試運転音のチェックや可動部分から目を離さない等の作業習慣の育成に努める。特に生徒の心情を的確に把握し、学習を心から楽しめるようにする。
- (2) 仕事量や態度などを日誌に記録する自己評価だけでなく、作業方法や製品の改善に役立つ助言など、第三者からの評価を効果的に生かし、本生徒の成長を支える人々の存在に気付けるようにする。
- (3) 販路開拓先は、親近感をもてるように交流経験のある商店や授産施設を中心とし、将来様々な相談等もできるようにする。

3 指導の内容及方法

学習過程	作業内容	指 導 の 方 法
習う (4～6月)	習作品を作る	・習作しながら、材料、方法、費用の概要をつかむ ・自分の担当製品を試作し、作業手順や工程を知る
作る (6～9月)	材料を購入する 先行品を作る	・販売店や材料の規格の下調べと購入準備をする ・型板で材料取りなどをして適切な板材を購入する ・治具や補助具等を適切に使用し製品精度を上げる
売る (9～10月)	販路を開拓する 改善、改良する 集金、納品する 伝票処理する	・値段や売り込みの言葉を考え、交渉の準備をする ・売り込み訪問の作法、伝票の切り方の練習をする ・訪問先へ電話し、都合を聞くなどして訪問する ・製品としての出来具合を尋ね、改善改良を加える ・取組の結果を反省し、正確で能率的な方法に直す ・納品書や領収書の記入などの業務を、適正に行う
役立てる (10～3月)	量産する 奉仕、貢献する 応用する	・売筋の製品や効率のよい方法をつかみ、生産する ・福祉団体等に製品を贈呈し、交流の輪を広げる ・木工教室を開いて、実演する

IV 指導の経過

●「習う」段階において、習作品を作るために糸のこ盤を操作する指導の流れ

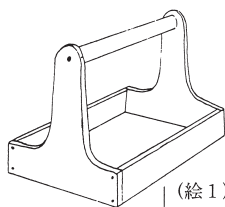
教師の働きかけ	本生徒の様子
・20mmの厚板での組み木作りを知らせ、まず、軟らかいカツラ材を切るように伝える。 ・カツラ材の厚板の切り口が垂直になるように、板材を送る速度を遅くするように促す。 ・軟らかいカツラ材30mmの厚板でサイコロが作れたら、硬いケヤキ材30mmの厚板で動物型を切り抜くことを促す。 ・過熱した糸のこ刃にろうそくを当て、冷却しながら切るように指示する。 ・厚板を切る作業が上手になったことをほめ、感想や楽しかった活動を尋ねる。	・スピードが速く切断角がひずみ、途中で糸のこ盤が停止してしまい教師に助けを求める。 ・スピードを遅くして負荷をかけなければ垂直に切れることが分かると、厚板切りに興味を示し、曲線やジグザグ直線を切る練習に進んで取り組む。 ・「板材が硬い、硬い」と言いながらも、時間をかけて少しずつゆっくり切り進むが、材から煙が出て、黒く焦げることを気にする。 ・ろうが溶けて、煙やにおいが出ることを訴えるが、切断面が摩擦熱で焦げなくなったことに驚く。 ・集中時間が長い「疲れる」と訴えるが、「また型抜きをやりたい」と作業日記に書く。

〈考察〉糸のこ盤の操作については、材の硬さや厚さなどに対応して、次第に難しい技能の習得へとステップアップしてきた。これらは単なる習熟練習ドリルとしてではなく、習得した技能を活用して型切り抜きやパズル作り等を楽しめる活動として行った。そうすることによって、本生徒が「次に、何ができればよいか」という見通しをもつことができ、切断面の品質向上や作業能率の改善に効果が上がった。

●「売る」段階において、製品を販売するために客と応対する指導の流れ

【T商店にて】教師の働きかけ	本生徒の様子
・(店主が)持ってきた製品を出すように促す。 ・(店の客が)「木の質感がとてもよい」とほめながら製品を手取る。そして表面にざらつきがあることや側端が鋭角であることを指摘する。 ・「どうする?」と再質問する。 ・(別の客が)「手さげ盆(次ページ絵1)がもう少し小さめだと、調味料の瓶ケースに使える」と言い、「どんなふうに使うのか」と尋ねる。	・「こわれないように、包んである」と言いながらふろしきをしていぬいにほく。 ・ほめられて深くうなずくが、問題点を言われると、体全体を緊張させ、不安な顔をして教師の方を見る。 ・「磨くときに、がんばります」と答える。 ・お茶を入れた茶わんを運ぶのに便利なことなどを身振りを交えて説明する。そして「(やはり)ちっちゃいのが、いいですか」と尋ね返し、印

- ・(同じ客が)「その印入れを見せて」と頼み、穴の大きさを直した製品かどうかを質問する。
- ・(同じ客が)印入れを手にとってながめていたが気に入ったので買いたいと申し出る。



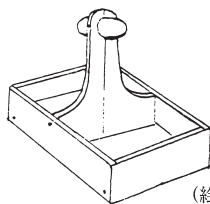
(絵1)

- 入れのように改良していきたいと答える。
- ・「今日、直したばかりです」と答え、印入れを取り出して客に渡す。
- ・びっくり顔で相手の方を向くが、すぐに「毎度ありがとうございます」と答える。

〈考察〉製品を販売する場面で、「ぼくらの作品をどう思っているのだろう」「どんな製品を求めているのだろう」という意識をしっかりとって、活動に取り組めるようになってきた。特に「売りたい」という気持ちから、客の質問には全力を傾けて答えることができたと考える。そして、製品を自らの手で販売できたことは、本生徒にとって満足感を得ることにつながり、客の求めに応じる製品作りに努めていこうとする意欲に結び付いていくことが分かった。

●「役立てる」段階において、身に付けた知識や技能を表現する指導の流れ

教師の働きかけ	本生徒の様子
・端材をつぎ合わせて、集成しているところを見せながら「この板の値段は無料だぞ」と投げかける。 ・「材料費が無料だし、見栄えや強度等に問題があるので、練習用に使いたい」と話す。 ・「これで(本生徒の主張する)小盆(絵2)を作ってみよう」と言って、次回から試作に入ることを伝える。(小盆の試作品が完成した段階で) ・「これをお客さんに見せたら、なんと言うかな」と質問する。	・「これで、何を作るのか」と質問し、「小さいから(前にT商店で話の出た)小盆を作るといい」と主張する。 ・(この集成端材で、製品が売れるように教えてくれた人たちに)「何か作ってあげてもいいか」と言い出す。 ・自分のアイディアが受け入れられたことをとても喜び、はやく型板を作るようにせがむ。 ・「また直すところを教えてください」と、にこにこしながら答える。



(絵2)

〈考察〉本実践を通してお世話になった人に「お礼をしたい、そして今後も交流を続けたい」という気持ちが端材活用の場面で現れ、端材を使った製作活動についても製品製作と同様に熱心に取り組むことができた。これは本生

徒が自分で身に付けた知識や技能を使って、製品を販売することを通して達成感を味わうことができ、自信をもてたからであると考ええる。その自信をもった姿は、これからも助言を素直に受け取り、より付加価値の高い製品を作っていこうとする態度に現れてきたと考えられる。

V まとめ

本生徒が自ら就労への意欲をもてるように、製作過程のみならず、実際に地域の商店等で販売することまでを視野に入れた作業学習に取り組んできた結果、次のような変容が見られた。

手順を踏んで木工製品を製作することで、墨線ぎりぎりまで加工精度をあげて、後で研磨する部分を少なく仕上げたり、切断面が直角になるように切削方向や順序を考えたりするなど、品質や効率をあげることを楽しみながら、作業に取り組めるようになった。また、消費者の要望や意見を製品作りに積極的に取り入れようとする姿勢をもつことができた。

これらの変容が見られたのは、まず「上手に製品を作るには、どうしたらよいか」という意識をもって知識や技能の習熟練習に励むなど、製作活動への見通しが明確にもてたことによるところが大きい。次に「得意先や消費者の求めに応じて、喜んでもらうには、どうしたらよいか」という意識をもち、自分が何をすれば、その要望にこたえられるのかが分かり、その実現へ向けて手間や時間を惜しまず取り組むようになったからであると考ええる。そして、自分で生産し販売できたという自信が、最終的に「お礼をしたい」という形で現れたものと考ええる。さらに、このように様々な角度から、本生徒の能力を引き出し「自分にもできる」という自信をもてるようにすることが、「他の仕事やレベルの高い作業ができるようになりたい」という意欲を引き出すことになる。このことが、身に付いた能力を働かせて社会の中で役立ちたい、すなわち、就労へ向けた意欲へとつながっていくと考える。

VI 今後の課題（略）

第2節 心の教育に関する研究

I 道徳

◆ 実践例 8（授業研究）—小 6 道徳—

本実践例は、主題「郷土の人々に学んで」において、花いっぱい運動を推進している人たちの思いや願いに触れることを通して、郷土を大切にしようとする心情を育てようとしたものである。具体的には、資料「徳べえざくら」を基に郷土を支える意味について追求したあと、花を育て続ける理由を考える活動、推進している人たちの思いや願いに触れ、調べたことを整理する活動、村のPRコピー「ほっと白沢花の村」にこめる願いを考える活動を通してねらいに迫ろうとした実践例である。

授業研究で大切なことは、手だてによって得られた子供の変容を、質的な面と量的な面とでとらえていくことである。

本実践例は、ねらいとする道徳的価値「郷土愛」に対する価値観の変容を、グラフと表に基づいて量的変容と質的変容という観点からとらえている。具体的には、学級全体では、グラフに表し量的変容として考察したり、児童の考え方を分類して表に示し、質的変容として考察したりしていることに意義がある。

郷土を大切にしようとする心情を育てる道徳指導の工夫
—花いっぱい運動を推進している人たちの思いや願いに触れて—

I 主題設定の理由

社会の変化に伴って、人間関係が希薄化し、地域社会とのかかわりを軽視する状況が生みだされてきている。このような中、ともすれば児童は自分自身だけの力で生きていてと考えてしまい、自分たちの生活が地域の人々の営みや支え合いの上に成り立っていることに気付かないでいる。そこで、地域の人々の営みや支え合いのよさやすばらしさに触れることによって、郷土を

大切にしようとする心情を育てることは意味があると考ええる。

(後略)

II 研究のねらい

主題「郷土の人々に学んで」において、①推進している人たちが白沢村のために花を育て続けることができる理由を考える活動、②調べた結果を構造化した図を基に、自分たちが追求してきたことを整理する活動、③「ほっと白沢花の村」にこめたい意味を考える活動を通して、郷土を大切にしようとする心情が育つことを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 道徳の時間 1 において、資料「徳べえざくら」を基に、主人公が桜を植え続けた理由を構造化したあと、花いっぱい運動を推進している人たちの活動理由を考えることを通して、推進している人たちの思いや願いを追求しようとする意欲をもつことができるであろう。
- 2 道徳の時間 2 において、調べた結果を構造化した図を基に、自分たちが追求してきた事実を整理することを通して、推進している人たちの郷土に寄せる思いや願いが多様であることに気付くことができるであろう。
- 3 道徳の時間 2 において、「ほっと白沢花の村」にこめたい意味を考えることを通して、郷土に対する自分の願いをもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 郷土を大切にしようとする心情をもっている児童とは

郷土を大切にしようとする心情をもっている児童とは、①推進している人たちの思いや願いを追求しようとする意欲をもっている、②推進している人たちの郷土に寄せる思いや願いが多様であることに気付いている、③郷土に対する自分の願いをもっている、の三つの姿であるととらえた。(後略)

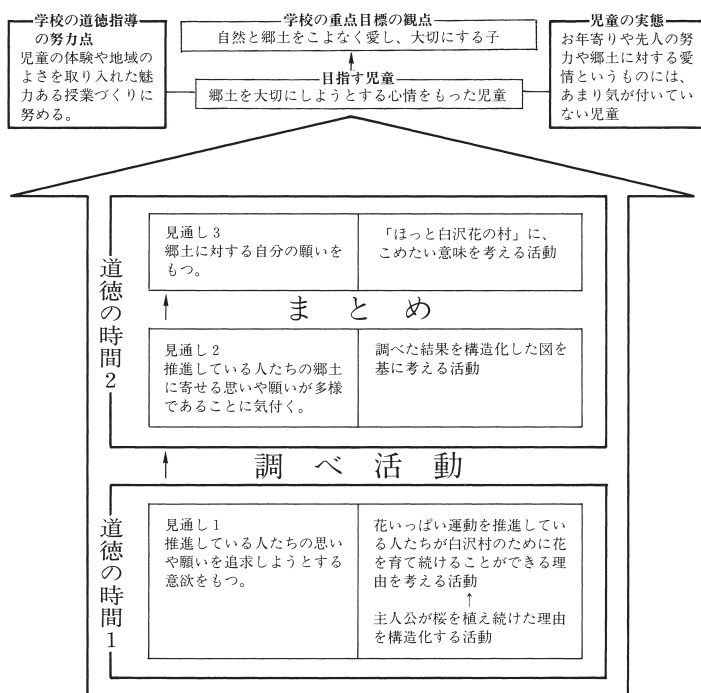


図 1 研究の全体構想

(2) 花いっぱい運動を推進している人たちの思いや願いに触れてについて
(略)

(3) 指導計画 (略)

2 研究の方法 (略)

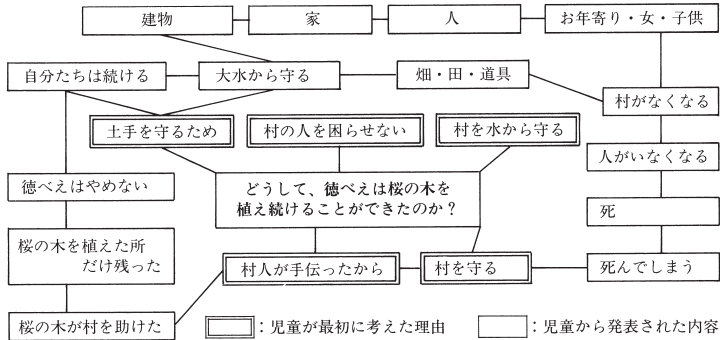
V 研究の結果と考察

1 思いや願いを追求するための意欲をもてたか

ア 活動の概要

資料「徳べえざくら」において、主人公が桜の木を植え続けることができた理由について各自が考えたことを整理した(資料1)。それを基に、花いっぱい運動を推進している人たちの活動理由を考える活動を行った。

資料1 桜を植え続ける理由を構造化した図



次に、六つの班に分かれ、個人で考えたものをそれぞれ出し合い、考え方の傾向の似ているものごとにまとめた。その後、各班から出されたものをまとめていった。

イ 結果と考察

花を育て続ける理由の予想を、事前アンケートと徳べえぎくらの価値を追求したあとの記述との関連で分類してみると、図2のようになった。記述された理由の個

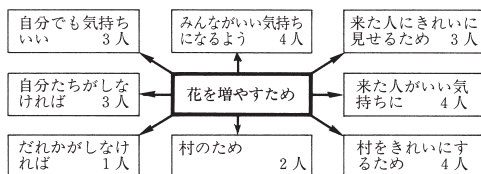
数を比べると、事前は10個であったが、追求後は17個と理由の数が増えた。また、理由の内容で比べると、事前アンケートでは環境美化に関する観点で考えている

		主 な 理 由	人数	総 数 を 棒 グ ラ フ 化
自分自身	事前	やりたくてしている	1人	2人
	事前	健康のため	1人	
	事後	自分でも気持ちがいい 自分たちがしなければ だれかがしなければ	3人 3人 1人	7人
	事後			
他の人	事前	村をきれいに见せる 心の安らぎ 心を豊かに	10人 2人 2人	14人
	事後	みんながいい気持ち 来た人がいい気持ち それ以外の理由 3個	8人 4人 8人	20人
	事後			
	事後			
環境美化	事前	花を増やすため 村をきれいに さびしいから	24人 12人 4人	40人
	事後	花を増やすため 村をきれいに それ以外の理由 3個	7人 7人 6人	20人
	事後			
	事後			
郷土	事前	村をよくするため	5人	8人
	事後	村おこし	3人	
	事後	明るい村にするため 村の役に立つよう	4人 3人	
	事後	それ以外の理由 2個	3人 5人	12人

図2 花を育て続ける理由を分類した図（複数回答）

児童が多かった。追求後では、**資料2 つながりを考えての記述（複数回答）**

自分自身に関する観点、他の人とののかかわりに関する観点、郷土のためにに関する観点からの記述が多くなり、価値を一步深く考えるようになってきているといえる。



さらに、資料2のように、つながりを考えての記述も見られ、推進している人たちの思いや願いを関連付けて分かろうとする気持ちを高めている児童もいる。

これらのことから、徳べえざくらで追求した構造図を基に、自分なりの観点を増やし、価値を一步深く考えようとしていること、事実のつながりを考えて関連付けて分かろうとしていることから、推進している人たちの思いや願いの関係を追求するための意欲をもつことができたといえる。

2 郷土に対する思いや願いが多様であることに気付いたか

ア 活動の概要（略）

イ 結果と考察

学級全体で調べた結果、94個の思いや願いが集まり、結果を観点ごとの数で比べると、図3のようになる。図2と比べて、自分自身に関する観点が3観点、他の人とののかかわりに関する観点が1観点、環境美化に関する観点が2観点、環境保全に関する観点が2観点、合計で新たに8観点を見い

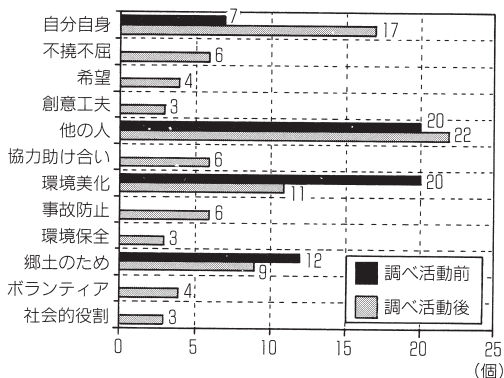


図3 観点ごとに数を比べた図（複数回答）

だした。

資料3 郷土のために関する観点の理由

例えば、郷土に関する観点で詳しく見ていくと資料3のようになる。調べ活動前は4個であったものが、調べ活動後は11個に分かれた。

そのため、班の発表後に各自がまとめた記述において、

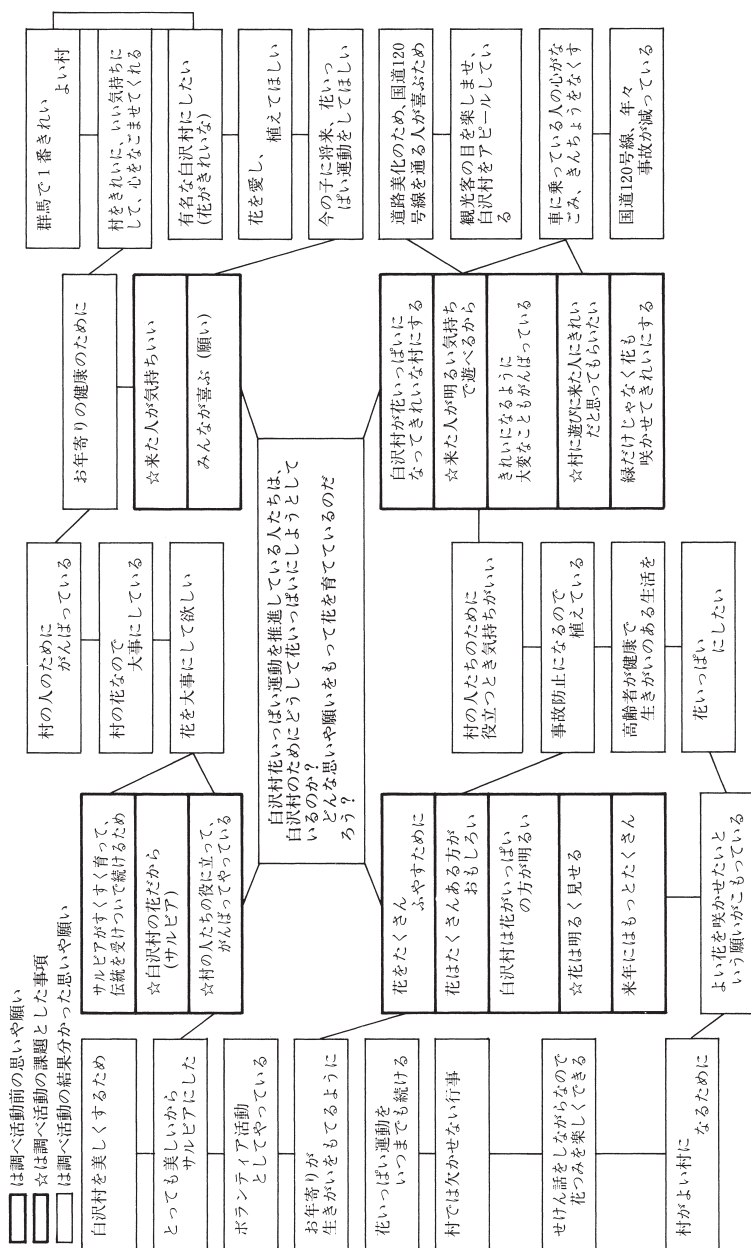
「自分の生きがいや事故防止、道路美化になるなど、白沢村にとってすばらしいことだ」「よい村にするためにボランティアでしている。また、みんなが気持ちよくなるようにしていると思う」などが見られた。このことから、花いっぱい運動はいろいろな価値と結び付いていて、「郷土のため」から、「自分自身、他の人のため、環境美化、事故防止、ボランティア」など、様々な種類の違った思いや願いがあることに気付き、それぞれが関連あることを結び付けて考えようとしている。

A子の班では、3人の方々から話を伺い、次ページ資料4のようにまとめた。そして、「村の人たちの役に立つと気持ちがいい」ということから、花を育てることに喜びがあるという自分自身に関する観点、「ボランティア活動としてやっている」「村の人のためにがんばっている」ということから、ボランティア、社会的役割という観点に気付くことができた。また、「花をたくさんふやすため」を詳しく見ていくと、花を植えることで事故防止になり、村の人たちの役に立つと気持ちがいい、健康で生きがいのある生活、村がよい村になる、いつまでも続けたい、につながった。また、ボランティア活動、白沢村を美しくするため、にもつながった。このことから、種類の違う思いや願いがあり、それぞれに関連のあることが分かった。

これらのことから、調べた結果を構造化した図を基に、自分たちが追求してきたことを整理することを通して、推進している人たちは種類の違った思いや願いをもっていること、それぞれが関連があることを結び付けて考える

調べ活動前	⇒	調べ活動後
・村のため ・明るい村にする ・住みやすい村にする ・村の役に立つよう		・村のため ・明るい村にする ・住みやすい村にする ・村の役に立つよう ・よい村にする ・村の人が喜ぶ ・ボランティア ・村で選んだサルビアを増やす ・村では欠かせない行事 ・村の伝統 ・村のPR

資料 4 A 子の班でまとめた思いや願い



ことができるようになり、推進している人たちの思いや願いが多様であることに気付くことができたといえる。

3 郷土に対する自分の願いをもてたか

ア 活動の概要

学級全体で「ほっと白沢花の村」について、各自が「どんな、ほっとな白沢村にしたいか」三つ以上考えて花の中心に記述した。また、中心に記述した根拠となる事項を考えてカードに書き、周りに花として咲かせた。そして、その考えたことを基に、白沢村に対する自分の願いを書いた。

イ 結果と考察

学級全体で「ほっと白沢花の村」の中心に記述された83個の内容を分類すると図4のよう

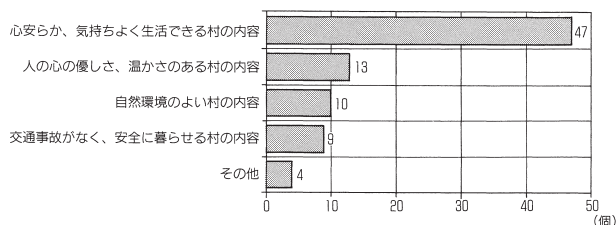


図4 学級全体でPRコピーにこめた意味の分類（複数回答）

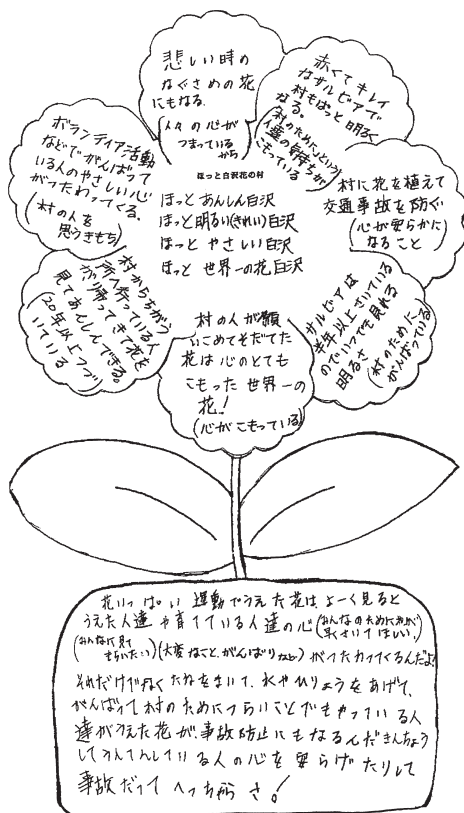
になる。（中略）

A子のシート

（次ページ資料5上段）の中心に記述した事項と周りに飾った花との関連を分析してみると次ページ資料6のようになる。

花の中心に記述した事項は、花は人の心を和ませ、そして、事故防止にもつながること、除草剤は少ししか使わないこと、昭和49年から続いていることから、「あんしん」できる村になってほしいと考えている。また、サルビアは開花期間が長く、赤くてきれいであること、4種類の花を育て目で楽しませる工夫をしていることから、「明るい（きれいな）」村になってほしいと考えている。そして、村の人や訪れた人の心を和ませ、いい気持ちになってもらいたいという願い、事故防止やみんなの喜びにつながるということから、「やさしい村」になってほしいと考えている。さらに、花の白沢と他の県ですぐ分かること、花の種が北海道から九州、遠くインドまで行っているとい

資料5 A子の「ほっと白沢花の村」



資料6 A子のシートの分析表

あんしん	悲しいときのなぐさめの花
明るい(きれい)	村もパッと明るくなる
やさしい	交通事故を防ぐ
世界一の花	いつでもみられる明るさ
	心のこもった世界一の花
	花を見て安心できる
	やさしい心が伝わってくる

う事実から、「世界一の花」のある村になってほしいと考えている。また、「こんな村にした」の記述からでは、調べ活動や授業を通して、郷土のために20年以上にわたり花を育て続けているがんばりや、みんなに喜

んでもらいたい、みんなの心を和ませたい、事故が減ってほしいなど推進している人たちの思いや願いのすばらしさに気づき、自分も地域の一員として伝えていきたいという願いをもった。

(後略)

VI 研究のまとめと今後の課題 (略)

II 生徒指導

◆ 実践例 9（事例研究）—小 6 生徒指導—

本実践例は、心の教育に関する問題を取り上げ、不登校児に対して指導・援助を行ったものである。具体的には、指導者が家庭訪問を行い、対象児と母親への指導・援助を行った。対象児には、指導者との信頼関係を築き、段階を踏んで友達とかかわっていけるようにした。母親には、気持ちを受容しながら、自分の力で解決できるように援助した実践例である。

事例研究を進める際に大切なことは、対象児に関する多様な資料から多角的に問題を検討することである。

本実践例は、保護者や対象児を取り囲む環境にかかわりながら、不登校の問題の原因にかかわることを検討し、指導・援助していることに意義がある。

不登校児童への指導・援助

—家庭訪問での本人への指導と母親への面接による援助を通して—

I 対象

小学校 6 年女子 B 子（指導者の立場：担任）

II 問題の概要

B 子は、6 年生になってからは、朝、「気分がすぐれない」という理由で、断続的に欠席するようになった。担任が迎えに行くと登校でき、4 月下旬に行われた修学旅行に参加した。それ以降、担任が迎えに行っても登校できず、欠席が続いている。

III 問題の理解に必要な資料

1 生育歴（母親との面接から）

両親は、B 子が生まれると祖父母と同居するようになった。そのころから

母親は、祖父母に気をつかうようになり、B子にも祖父母の前で行儀よくさせたり、勉強でよい成績をとらせようと、細かいことにまで指示をしたり注意をしたりした。B子が幼稚園に上がるまでは、母親は出かける時はいつも、B子を連れていくようにした。

父親は、子供がB子一人であるということから、甘やかさないようにと考えており、養育態度が厳しく、強くしかることもある。このような態度に、母親はもっと愛情をもったしかり方をしてほしいと、父親に言ったこともある。

幼稚園入園時には母親の後追いをすることが多く、幼稚園に慣れるまでに時間がかかった。

2 家庭での様子

登校時刻が過ぎた後起床し、朝食を食べる。母親が欠席の連絡をした後は、本を読んだり、テレビを見たりしている。

社会体育のミニバレーボールに入っているが、5月からは練習に行っていない。

3 学校での様子（前担任から）

4年生の3学期ごろから、時々登校を渋って欠席することがあった。

5年生では、欠席が40日以上であった。授業では、漢字練習、図画に真剣に取り組んでいた。黒板の図や文字を丁寧に写すこともできる。宿題や自由学習など、自分で目標を決めてやり始めるが、最後までやらないと気が済まず、夜遅くまでかかってやることもある。授業中も学習への取組の中で、自分が思ったようにできないと気が済まない様子が見られた。

授業中、人前で発表することが苦手で、友達から何か言われると黙ってしまう。休み時間等、自分から友達に声をかけることは少ないが、声をかけられれば応じられる。

4 諸検査等

- 学力検査 平均程度
- 文章完成法テスト（下線部はB子が記入した部分）

- ・私が努力していることは、学校へいくこと。
- ・自分でできないところは、学校へいけないこと。
- ・時々気になることは、学校みんなのこと。
- ・私の母は、やさしい。
- ・私の父は、すぐ怒るので、やさしかったらいいと思う。

○ 内科医から、身体的な異常はないと診断される。

IV 問題の理解

母親は、祖父母に細かなところまで気をつけていた。B子にも祖父母の前での行儀をはじめ、勉強面でもしっかりとできるように、細かいところまで指示したり注意したりしてきた。父親も、子供がB子が一人であるということから、甘やかさないようにと厳しい態度で接してきた。B子もそういう両親に従い、何でもしっかりとやろうと努力していたと考えられる。また、そのために、自分に対する父母の評価を絶えず気にするようになったと思われる。

学校生活でもB子は、常にきちんとできるように意識し、そのように取り組んできたと思われる。その結果、精神的に疲れるとともに、きちんとできないことや、間違えることに対して、不安が強くなったのではないと思われる。さらに、小さいときに母親と一緒にいることが多かったことや、小学校で自分から進んで友達とかかわる経験が少ないことから、友達に対して関心がありながら、どのように自己表現したり、かかわったりしたらよいか分からず、緊張を感じていたと思われる。

以上のことから、B子は、母親の期待にこたえようとする気持ちや、母親の干渉、父親の厳しさから完全欲求や固執性が強まり、学校でも周りからの評価が気になり、間違えることやできないことに対する不安が強まっていったと考える。さらに、友達に関心があるにもかかわらず、自己表現することが苦手であることや、かかわり方が分からずにいることから緊張が高まり、不登校になったと考える。

V 指導方針

家庭訪問をし、B子には「訪問指導」、母親には「面接」を通して指導・援助する。

1 B子に対して

- (1) 訪問指導をし、一緒に遊んだり、B子の興味や関心のある話をしたりして、指導者との信頼関係を築く。
- (2) 自分のことは自分で考えて決定し、行動する機会を多く設け、自分の考えで行動できることへの自信をもてるようにする。
- (3) 友達がB子の家を訪問するようにし、B子が友達とのかかわりを体験することを通して、友達とのかかわり方や自己表現の方法を学んだり、緊張を和らげたりできるようにする。

2 母親に対して

母親の不安を受けとめ、B子へのかかわり方や父親への対応について、母親自身の気付きや考えを支持し、B子を見守ることができるよう援助する。

VI 指導経過

5月〇日 母親との面接

母親は、「B子は学校のことが気になるらしく、落ち着かずにいるようなので、B子が猫の世話などをしたり、絵をかいたりするのを黙って見守るようにしている」と話す。

指導者が「お母さんがそのように、B子のそのまますを受け入れてやることも大切ですね」と伝えると、母親は「これからは、B子のよいところをなるべく見つけて声をかけようと思っています」と話す。

6月〇日 訪問指導

放課後、家庭訪問をし、B子に「もしよかったら、学校で先生のお手伝いをしてくれないか」と誘うと、「いいよ」と答え、ついて来た。学習プリントの枚数を点検するなどの仕事を一緒にしたあと、教室へ誘うと入ることができた。自分の席に座ったあと、後ろの修学旅行の絵をみていた。やがて、

指導者に話しかけてきた（逐語記録1）。

— 逐語記録1（Tは指導者） —

B子：先生、このクラスは何人だったっけ。

T：〇〇人だよ。どうして？

B子：まだ、〇人の人ができていないんだね。

T：気になるの？

B子：わたしも仕上がっていないから。

T：そうか、絵が仕上がっていないのが気になっているんだね。

他のお友達と同じように、仕上がったときに出してくれればいいよ。

B子：はい。

6月〇日 訪問指導（友達との交流）

放課後、B子の仲のよい友達に指導者が、「B子の家に遊びに行かないか」と声をかけ、一緒にB子の家に行く。B子は友達と遊ぶのが楽しいらしく、自分の部屋で絵をかいたり、庭でみんなと輪になってバレーボールのパスをしたりして楽しんでいた。

7月〇日 母親との面接

母親は、「先日友達が来てくれたときに、B子は学校に行きたいのだけれど、朝になると行けなくなってしまう、と友達に話していました」と話す。また、「無理に学校に行かなくてもいいとはB子に話しているんですが、父親は『それは、子供を甘やかすことになる』と考えています。わたしは、時間をかけて父親にB子のことを理解してもらえるよう、努力を続けたいと思っています」と話した。指導者は、「お父さんと意見が違い、そのことでどのようにお父さんと話し合ったらよいか考えているんですね。無理をしないで、機会を見つけては、ゆっくりと話し合ってみてはいかがですか」と返した。

9月〇日 訪問指導

B子の家に行き、遊びに誘ったところ、「バレーボールのパスをしたい」というので、一緒にやる。相手がボールを落とすたびに、1点ずつ得点を得られることにした。B子はパスが上手で、指導者よりも得点が多く、喜んでいた。「先生、また今度やろうね」と声をかけてくれた。

その後訪問したときに、「今度、学校の相談室で絵をかきたい」と話したので、学校に行く日を約束した。

10月〇日 放課後の登校・友達との交流

放課後、友達と一緒に学校の相談室にやってきて、棚から自分で色画用紙やクレパスを取り出し、楽しそうに友達と絵をかいていた。家に帰ってから母親に、「また行きたい」と話していたそうである。

最近ミニバレーボールの練習にも行けるようになったそうである。

11月〇日 母親との面接

父親がB子に対して、優しく接するようになってきたことをうれしそうに話す（逐語記録2）。

逐語記録2

母：父親がB子に対して優しくなったような気がします。

T：ああ、今は優しくなった気がする。

母：それに、ミニバレーの練習にB子を送って行ってくれるようになったんです。

T：それはうれしいですね。

母：はい、スーッと気持ちが楽になったような。

11月〇日 訪問指導

B子と一緒に絵をかいた。B子は「また相談室で絵をかきたいな」と言い出したので、学校の相談室に行く日を約束した。

母親は、「最近B子が学校の話をするようになった」とうれしそうに話した。

12月〇日 友達との交流

約束した日の放課後、友達と一緒に相談室に来る。友達と一緒に絵の具やクレパスなどいろいろな材料で絵をかいて遊んでいた。帰りがけに、「先生、もうすぐ冬休みだね。3学期には教室に行ってみたいな」と話した。

VII まとめと今後の課題

6年生になって不登校になったB子と母親に対して、家庭訪問でのB子への指導や母親への面接を通して援助を行ってきた。その結果、B子は自分の考えで行動したり、友達と遊んだりすることができるようになってきた。また、父母が細かな指導や注意を控え、B子を見守るように努力を重ねるにつれ、B子の緊張もほぐれてきたようである。また、少しずつ指導者や友達とかかわる機会を設けてきたことにより、学校への関心も出てきて、放課後、相談室や教室に来られるようになった。

このような変容の主な要因として、次の3点が考えられる。

- ① 指導者がB子に添いながら、一緒に遊んだり話したりすることによってB子の緊張が和らぎ、自主性が発揮できるようになり、気持ちが安定した。
- ② 友達と遊ぶ場を設けたことにより、友達とのかかわり方を学び、緊張せずに友達とかかわれるようになった。
- ③ 母親との面接を通して、母親が楽な気持ちでB子にかかわれるようになるとともに、B子の自主性を尊重するかかわりを両親がするよう努力してきた。

今後、さらにB子の自主性を発揮する場面を増やすと同時に、緊張感が和らげられるように、指導・援助していきたい。

第3節 生き方についての指導に関する研究

I 進路指導

◆ 実践例10（授業研究）—中1学級活動—

本実践例は、ジェンダー（文化的、社会的に形成された性差）を視点にして、職業に対するとらえ方から性別の枠を取り除くことで、今まで目を向けることのなかった職業について興味・関心を広げ、仕事内容や、それにふさわしい能力や適性をとらえなおし、進路選択への意欲を高めることを目指したものである。具体的には、働いている人（例 保育士や看護師）へのインタビューやVTR資料の視聴を通して、職業に対する多様な考え方や生徒自らのよさを生かした進路選択への意欲付けを図った実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、目指す子供を育成するために、手だてをどの場でどのように投入するかを構想することである。

本実践例は、男性（女性）中心の職業で数少ない女性（男性）へのインタビューを行い、子供たちが主体的にかかわり、自己の生き方を考える活動へとつなげているところに意義がある。

自分にあった進路選択をしようとする

意欲を高める指導の工夫

—職業とジェンダーとのかかわりを通して—

I 主題設定の理由

本校の進路指導はどの職業も平等であるという視点で進めてきた。

（中略）

そこで、進路指導でジェンダーの視点を取り入れた学級活動を行う。職業の内容、職業にふさわしい能力・適性を挙げ、男性だけが可能か、女性だけ

が可能か、男女ともに可能か一つずつ考えていくことを通して、職業選択、仕事内容、能力・適性は性別で決まるのではないこと、風習やしきたりとしてのジェンダーが職業選択の自由とかかわってきたこと、男女ともにどの職業を選択してもよいことに気付くようにする。次にジェンダーにとらわれないで、自分にあった生き方をしている人を教材として取り上げる。サッカー監督を目指す日本人女性、男性が多く働く職業の中の女性、女性が多く働く職業の中の男性にインタビューしたVTR資料を活用する。性別、国境を越えてサッカー監督という夢を実現させるために努力している姿勢や、身近な所で自分にあった職業で働く人の体験は生徒の心を揺さぶると考えられる。この資料から夢や可能性を広げ、自分の夢を追いつけ前向きに生きる姿を学べるようにする。生徒は自分にあった職業、生き方があることに気付き、自分のよさを生かし、自分にあった進路選択をしようとする意欲を喚起できるであろう。なお、この実践を「身近で働く人々」の前に位置付ける。職業から性別の枠を取り除くことで、今まで目を向けることのなかった職業について興味・関心を広げると考える。

男女ともにどの職業でも選択する自由があることを理解し、自己実現を図る場として職業の理解を深め、自分にふさわしい、自分にあった進路選択を意欲的にしようとする生徒を育成したい。以上のことから本研究主題を設定した。

II 研究のねらい

学級活動において、生徒が興味・関心をもつ職業が男女ともにふさわしいか考えることを基に、男性が多く働く職業の中の女性と、女性が多く働く職業の中の男性の体験に着目し、今後の自己の生き方を考える活動を行うことによって、自分に合った進路を選択しようとする意欲が高まることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 学級活動1で、生徒が興味・関心をもつ職業について、「男性にふさわしい職業か」「女性にふさわしい職業か」「男女ともにふさわしい職業か」を考える活動、「仕事内容」や「それにふさわしい能力・適性」について「男性だけが可能か」「女性だけが可能か」「男女ともに可能か」の性別に着目した三つの観点で検討した後、全体で話し合うことにより、ジェンダーに気付き、男女ともにどの職業を選択してもよいことを理解できるであろう。
- 2 学級活動2で、生徒が今後の自己の生き方を考える活動において、男性が多く働く職業の中の女性、女性が多く働く職業の中の男性に着目し、それらの人たちへインタビューしたVTR資料から体験を聞き、教材「私の進む道」を活用することにより、自分にあった進路選択をしようとする意欲が高まるであろう。

IV 研究の内容

- 1 基本的な考え方 (略)
- 2 実践の展開

実践の流れ	主な活動内容
事前活動1	(略)
学級活動1	○職業の「仕事内容」、ふさわしい「能力・適性」について「男女ともに可能か」検討する。 ○自分が興味・関心をもつ職業は「男性にふさわしい職業か」「女性にふさわしい職業か」「男女ともにふさわしい職業か」を考える。 ○風習やしきたりとしての職業とジェンダーとのかかわりを考える。
事前活動2	○学級活動係が保育士、看護師、警察官へのインタビュー内容を考える。 ○インタビュー場面のVTR資料を作る。 ○学級活動係が進路に関する意識調査のまとめをする。
学級活動2	○学級活動係が教材「私の進む道」を活用して、進路に関する学級の実態を発表する。 ○サッカー監督を目指す女性のVTR資料を見て、感じたことを発表する。 ○VTR資料から男性保育士、男性看護師、女性警察官の体験を聞く。 ○ワークシート「私の進む道」を活用して、今後の自己の生き方を考える。
事後活動	(略)

話し合う場面で、E男の「保母は女性にふさわしい職業」の発言に対して、A子は資料2のように答え、強くうなずいた。これらのことから、A子は幼稚園の先生の仕事内容、能力・適性は男女とも可能であること、幼稚園の先生は男女ともにふさわしい職業であることを理解できたと考えられる。本時のまとめの場面で、A子は「ジェンダーの意味が分からなかったが、今日の授業で分かってよかった」と発言している。資料1の授業の感想を見ると、「男がする仕事、女がする仕事だと思っていた」と仕事を性別で区別していたこと、すなわち自分がジェンダーの視点をもっていたことに気付いた。また「職業を選ぶことが自由にできることが分かりよかった」と記述していることから、男女ともにどの職業を選択してもよいことを理解したと考える。

(中略)

また、資料3にあるように、学級活動1の前後で学級全体の意識を比較してみると、男性にふさわしい職業、女性にふさわしい職業について「ある」が42%から0%に、

**資料3 「男性（女性）にふさわしい職業があるか」
調査結果**

「どちらかといえばある」が39%から6%に大きく減少した。これは、学級活動1前に職業とかかわり

	学級活動1の前	学級活動1の後
ある	42 %	0 %
どちらかといえばある	39 %	6 %
どちらかといえはない	16 %	49 %
ない	0 %	45 %
考えたこともない	3 %	0 %
	100 %	100 %

のあるジェンダーの視点をもっていた生徒が、学級活動1後にジェンダーに気付いたことを意味する。このことから今回の実践で生徒はジェンダーに気付き、どの職業でも男女ともに可能であることを理解したと考える。 (以下略)

VI 研究のまとめと今後の課題 (略)

II 学年・学級づくり

◆ 実践例11（授業研究）—小3 学級活動—

本実践例は、自分や友達のよさを発見していく「3の1探検宝島」の活動を通して、互いのよさに気付き合おうとする児童を育成し、学級づくりに生かそうとしたものである。具体的には、自分たちのよさに気付く探検への意欲をもつ事前活動、1週間の生活を通して様々な友達のよさに気付く探検活動、気付いたよさを伝え合う喜びを味わう事後活動を行うことにより、互いのよさに気付き合うことができるようにした実践例である。

授業研究で大切なことは、投入した手だてを具体化し、実践することである。

本実践例は、互いのよさに気付くための「探検の旗作り」「宝島巨大マップ作り」「宝の花束作り」などの手だてが、児童の学習を動機付け、主体的活動を促していることに意義がある。

互いのよさに気付き合う学級活動

—「3の1探検宝島」を通して—

I 主題設定の理由

社会の急激な変化による子供たちの人間関係や生活体験の希薄さを背景として、子供たち自らが、自他の存在をかけがえのないものとして受け止め、一人一人のよさや可能性を生かしながら生きる力を育成することが望まれている。それには、子供たち自らが、進んで互いのよさに気付き合いながら、かかわりをもつ活動を体験し、そこで味わった喜びや自らのよさに対する自信を生かして身の回りの対象と進んでかかわり、よりよく生きていこうとする姿勢を丹念に育てることが大切であると考ええる。

本学級の子供たち（3年生 男子13名、女子17名）は、元気で、自分の思いを表すことはできる。しかし、自分や友達のよさに気付いたり、それを伝え合ったりするところまでは至っていない。その原因としては、今まで、自

分や友達のよさに気付く体験や、新しい見方の大切さを考えたり、自信につながる喜びを味わったりすることが少なかったからであると考ええる。

そのため、子供たちが、様々なよさに気付くための日常的な体験活動を行い、それを基に、学級活動の中核とした「互いのよさに気付き合う」活動を計画し、自分や友達のよさに気付くことに意欲をもち、友達のようなよさに気付き、気付いたよさを伝え合う喜びを味わえる、「ワクワクした、よさ発見」の体験をしていくことが大切であると考えた。

そこで本研究では、子供たちが今までの「よささがし」を振り返り、新たに、よさに気付く活動として「3の1探検宝島」を計画した。それは、今までの「よささがし」を新たに見直した上での学級を「3の1宝島」と名付け、よさを「宝」、よさに気付くための活動を「探検」とし、探検へのめあてを表す活動、宝を発見する活動、発見した宝を伝え合う活動からなる一連の活動に取り組むようにしたものである。（後略）

II 研究のねらい

「3の1探検宝島」の学習において、①自分や友達のよさに気付くためのめあてを表す活動、②友達のようなよさを発見する活動、③気付いたよさを伝え合う活動を行うことにより、友達相互の新たなよさに気付き合うことができることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 学級活動①において、「よささがし」を基に、自分たちの探検のめあてを表すための「探検の旗作り」を行えば、探検活動に対する意欲をもつことができるであろう。
- 2 探検活動において、友達のよさ「宝」を観点を設けて分類し、「宝島巨大マップ作り」を行えば、友達のようなよさに気付くことができるであろう。
- 3 学級活動②において、気付いた友達のよさ「宝」の交換を基に、「宝の

花束作り」を行えば、気付いたよさを伝えたり、伝えられたりするものの喜びを味わうことができるであろう。

IV 研究の内容 (略)

V 研究の結果と考察

1 自分のよさや友達のよさに気付いていくことに意欲をもつことができたか

(1) 実践の概要

学級活動①「探検の旗を作ろう」で、自分たちの探検のめあての旗を作り、探検のシンボルとして「宝島巨大マップ」に張る活動を行った。(後略)

(2) 結果と考察

A男は、探検の旗に「楽しく、おもしろい探検にしたい。ちゃんとしたいから。こうしなきゃ楽しくないから」と書いた。探検日記には「よかった。楽しい。来週の探検でちゃんとやりたい。またこういうのをやりたい。3年1組のみんなで、先生も合わせて」と感想を書いた。また、アンケート結果の発表を聞いて、「みんなやる気があると感じ、ぼくもがんばろうと思った」と話した。これらのことから、探検隊の一人としてめあてを考え、旗が作れたことで、3の1みんなでの探検活動への期待感をもてたことが分かる。

また、アンケートで「友達のよさを発見していく活動〔3の1探検宝島〕は楽しみですか」の問いに、30名全員が「はい」と答えた。

この活動で、めあてをもち、全員で旗を作ったときの気持ちや活動への期待が充実感となり、よさ発見活動への意欲が高まったと考えられる。以上のことから、探検のめあてを表す探検の旗作りの活動を行うことにより、探検宝島に対する意欲をもつことができたといえる。

2 友達の様々なよさに気付くことができたか

(1) 実践の概要

1週間、友達のよさ発見のための探検活動を行った。友達に伝えるために、見つけた宝を「発見！宝カード」(宝発見の場面、その宝にあった名前、そ

の友達に送るメッセージ)に記入し、友達の宝に気付くため、宝につけた名前を基に、探検カード(資料1)「やさしき森、がんばり山、しっかり町、アイデア湖、新種」に、宝の種類を分類し「宝島巨大マップ」に張った。

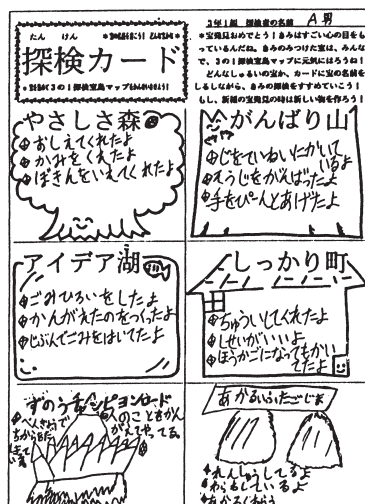
新種の宝(資料2)の時は、宝島に合う楽しいもの[例 なかよし木]を作って張った。

(2) 結果と考察

A男は、探検日記に「カードが5枚目になった。みんなに配れるからよかった。ぼくは、こういうのが一番得意で一番好きだ」と書いた。このことから、探検への自信を抱いていることが分かる。また、「宝島巨大マップ」を見て、「はじめ、やさしき森がふえた。がんばり山やしっかり町を作ったかったので前のことを思い出したり、発見したりした。すごくよかった」と書き、宝の四つの観点や全員の宝に目を向けたことが分かる。

全体では、[やさしき森39個、がんばり山35個、しっかり町39個、アイデア湖26個、新種36個]の発見があった。「宝の名前を〇〇にしたよ。これはやさしき森だね。次は新種だ!」と話し、四つの観点を手がかりに、新たな宝に目を向け合い、日に日にぎやかになる「宝島巨大マップ」作りに取り組んだ。新種の宝(資料2)は、仲間の観

資料1 A男の探検カード



資料2 新種の宝

——新種の宝につけられた名前——

- | | |
|------------------|--------------|
| *なかよし木 | *ともだちいせき |
| ・おしえて橋 | ・くふうどうくつ |
| ・宝島の海 | ・やくそくの家 |
| ・お話の森 | *なかよしすく |
| ・しかけの森 | ・がんばり工場 |
| ・心の花束 | ・がんばれいせき |
| *なかよし星 | ・さっぱりリーグ |
| ・元気宇宙 | *なかよしがね |
| ・元気草原 | ・そうじの花畑 |
| ・ひざおき花 | ・プラス1はいいね |
| ・そうじ星 | ・そうじ星(2回目) |
| ・ふしぎ公園 | ・恐竜と勉強 |
| *なかま川 | *みんななかま |
| *なかよし川 | ・本はいいね |
| ・話し花 | ・しんばい島 |
| ・星を大切に | *なかよし玉 |
| ・ずのうチャンピオンロード | } A男作
の新種 |
| ・明るいふたご島 | |
| ※ <*なかまの観点が多いもの> | |

点が多かった。

「発見！宝カード」を基に、よさに名前を付け、探検カードで種類をチェックし、「宝島巨大マップ」に張る活動は、様々なよさに目を向けることができたと考えられる。

以上のことから「発見！宝カード」を基に、宝の種類を探検カードの観点で分類し、「宝島巨大マップ」を作ることにより、友達の様々なよさに気付くことができたといえる。

3 気付いたよさを伝えたり、伝えられたりする事の喜びを味わうことができたか

(1) 実践の概要

学級活動②「発見した宝を伝え合おう」で発見した宝を交換し合い、自分に届いた「発見！宝カード」を台紙に張り、宝の花束を作り、その時の思いを宝の花束日記にまとめた。また、525個の宝が張られた「宝島巨大マップ」を見て、みんなの発見を振り返った。

(2) 結果と考察

B子は、140個の宝を発見できた。「B子さんすごいね」と、友達にも認められ、伝える喜びを味わった。花束日記（資料3）には「みんな、ちゃんと

していたので、いっぱい書けました。みんな力をあわせて、なかよく人のきもちをかんがえながらやっていました」と、集団の宝にも目を向け、自分については「自分は、こんなによいことを、はっけんできる人なんだとわかりました。（申略）いえでやりたいほど、はっけんすることがすきなんだなおもった」としている。

資料3 B子の花束日記

宝の花束にするす自分の思いと記念として、書き表します。

自分は、少ししか書けなかったのに3日、みんなちゃんとしていたのでいっぱい書けました。みんな力をあわせてなかよく人のきもちを、かんがえながらやっていました。これからもうはっけんを、いっぱいしていつまでもつづけていきたいとおもいますもうおわってしまっただけでかみにかきたいです。宝とや、たとき自分は人なによいことをはっけんできる人なんだとわかりました。おそろい自分のよさをかしました。3の1のことだけでなく3の2、3の3もをかしました。3の中ですべてかみにはかけないからです。いつまでもやがていきたいと思います。家とや、たことを、思いたすといえでやりたいほどは、はっけんすることがすきなんだなとおもった。これからみんなのよさを、はっけんを、つづけていきたいと思ひます。

また、「自分にも宝がきてうれしい。これからも続けたい」と話し、よさを発見し、伝え合う喜びを味わっている。

全体では、探検日記に「すばらしいけっさく品」「よさをさがせた気持ちでいっぱい」「3の1はすごい仲間」などの記述があり、満足感や喜びが分かる。アンケートでは、全員が、よさを伝え合うことは楽しく大切だと答え、喜びを表した。

以上のことから、「発見！宝カード」の交換を基に、集まったカードで宝の花束を作ることにより、よさを伝え合う喜びを味わうことができたといえる。

VI 研究のまとめと今後の課題 （略）

III 健康教育に関するもの

◆ 実践例12（授業研究）一中1特別活動一

本実践例は、健康な生活を送ろうとする意欲を育てるために、歯周疾患を取り上げたものである。具体的には、口腔内写真、位相差顕微鏡、情報カードソフトを活用して、学級活動（学級担任と養護教諭によるチームティーチング）と個別指導及び臨時歯科検診を関連させた保健指導を行った実践例である。

授業研究において「結果と考察」を行う際に大切なことは、子供の変容を質的、量的にとらえ、それを的確に表現することである。

本実践例は、全体の変容の中に個の変容の位置を示すなど、とらえた変容の姿を図表などを用いて的確に表現していることに価値がある。

健康な生活を送ろうとする意欲を育てる保健指導

一歯肉に関する教材を取り入れた歯周疾患の指導を通して一

I 主題設定の理由

本校における定期健康診断の結果では、アレルギー性疾患や歯・歯周疾患の診断を受けた生徒が非常に多い。特に歯周疾患の診断を受けている生徒は、全体の50%を超えている。（中略）

歯周疾患は、適切な歯磨きを励行して歯垢^{こう}を取り除くと、短期間で健康な歯肉に回復することができるという特性がある。その特性を生かした指導を行うことで、実践の成果を生徒自身の目で確かめられ、健康な歯肉に自分の力で取り戻せたという喜びを味わうことができる。このような保健指導を試みることで、健康の状態や健康を改善・維持する方法に気付き、自分にあった行動を積み重ね、成果を確かめることを通して行動を続けようとする気持ちが現れ、健康な生活を送ろうとする意欲に結び付くと考ええる。

そこで、本研究において、養護教諭が学級担任と学校歯科医と連携し、1年生を対象に歯肉に関する教材を活用して、学級活動と個別指導及び臨時歯科検診をかかわらせた継続的な保健指導を考えた。学級活動では、口腔内写真や位相差顕微鏡の教材を取り入れ、自分の歯肉の状態や歯肉の改善・維持の方法を知る。個別指導では、情報カードソフトを活用し、歯肉の変化していく様子を提示しながら目標を考え、行動を促す。このような活動のまとめとして、11月に臨時歯科検診を受け、歯肉の変化と自分の行動との関連を考える。

以上のような歯周疾患に着目した保健指導を通して、健康な生活を送ろうとする意欲が育てられると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい （略）

III 研究の見通し

- 1 学級活動「歯肉から健康を考えよう～今そしてこれから～」(学級担任と養護教諭によるティームティーチング)において、歯周疾患が多い事実を基に、口腔内写真や位相差顕微鏡を活用することにより、歯肉の状態や

歯肉の改善・維持の方法に気付くであろう。

- 2 個別指導において、情報カードソフトを使い、歯肉が変化していく様子を見ながら、自分の習慣を振り返ることにより、これからの行動目標をつかむことができるであろう。
- 3 臨時歯科検診において、9月からの口腔内写真を基に学校歯科医による診断・指導を受け、歯肉の変化と自分の行動とをかわらせて考えることにより、健康を改善・維持するための行動を続けようとする気持ちをもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

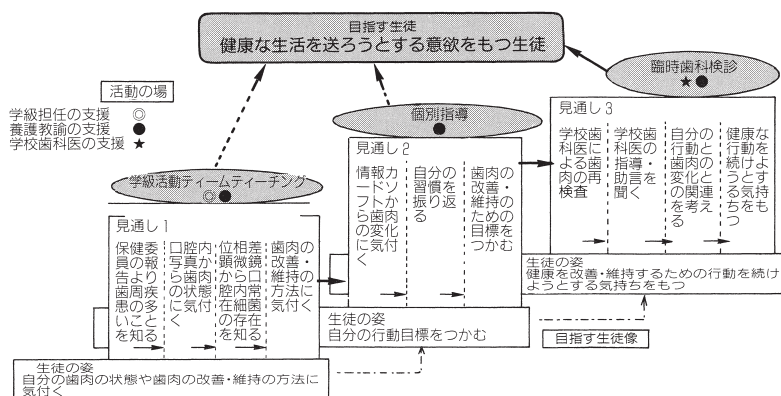
(1) 健康な生活を送ろうとする意欲をもつ生徒 (略)

(2) 情報カードソフトとは

データベースや表計算での面倒な入力作業が簡単にでき、画像データを入力できるソフトである。本研究においては、個別指導から臨時歯科検診にかけて、口腔内写真を画像データとして取り込み、経過を追いながら歯肉の変化を自分で確認する手段として活用する。

(3) 歯周疾患とは (略)

(4) 全体構想



2 研究の方法 (略)

V 研究の結果と考察

1 歯肉の状態や歯肉の改善・維持の方法に気付くことができたか

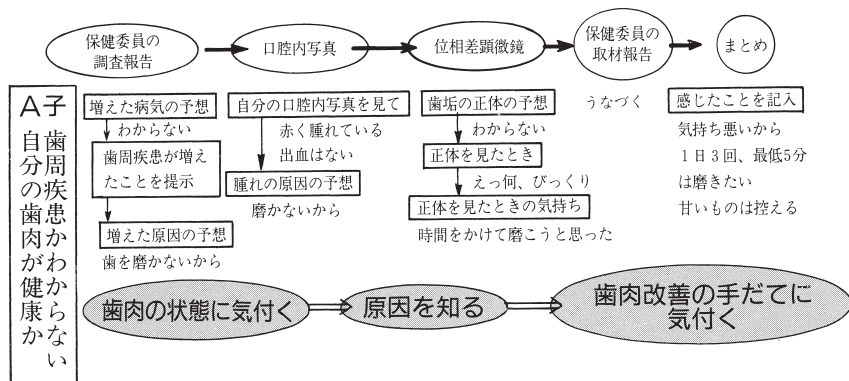
(1) 活動の概要

保健委員が「小6から中1にかけて増えた病気調べ」について報告した。歯周疾患が多くなった事実から、口腔内写真を示し、生徒が歯周疾患の症状を理解し、自己の歯肉の状態に目を向けた。続いて、位相差顕微鏡による歯垢の観察により、歯肉の改善・維持の方法について考えを進めた。さらに、保健委員が学校歯科医に取材した報告から、その方法を確認し、まとめの活動として感想を発表し合った。

(2) 結果と考察 (p.89参照)

A子の学級活動における反応は、資料1の通りである。口腔内写真を提示したことにより、腫れと出血の視点からワークシートに「赤く腫れているところがある、出血はない」と記入した。腫れの部位についても「腫れているところはどこ？」と問いかけると、その部位をきちんと指すことができ、自分の歯肉が歯周疾患であるということに気付くことができた。腫れの原因の予想場面では、「磨かないから」という発言をしている。位相差顕微鏡で歯

資料1 学習活動の流れとA子の反応



垢を観察すると友達に「えっ何、びっくり！」と話しかけた。この段階で腫れの原因を確認したと考える。歯垢の中に口腔内常在細菌が存在するという事実から、A子は「時間をかけて歯を磨く」とワークシートに歯垢を取り除くための方法を記述し、最後のまとめでは、「気持ち悪いから1日3回、最低5分は磨きたい。甘いものも控える」と記した。口腔内写真から自分の歯肉が歯周疾患であることが分かり、位相差顕微鏡から歯垢の観察をしたことにより、歯周疾患を改善するために、歯磨きは時間をかけなければならないということに気付くことができた。さらに学校歯科医の取材内容から、5分間という具体的な時間や歯垢をつくらなような食生活に目を向けることができた。（後略）

2 行動目標をつかむことができたか

(1) 活動の概要

第1回個別指導では、9月の口腔内写真をコンピュータから提示し、「健康な歯肉か不健康な歯肉か」と問いながら、歯肉の腫れ・色・出血について観察し、次に自分の習慣が正しい行動であるかどうか整理し、不足している行動から、歯肉の改善・維持につながるという行動目標を考えた。

第2回個別指導では、デジタルカメラで歯肉を撮影してコンピュータに取り込み、情報カードソフトから口腔内写真を見た。歯肉の状態を9月の口腔内写真と比べながら変化をチェックし、「なぜ歯肉が変化したのか」または「なぜ歯肉が変化しなかったのか」という問いから、自分の行動とのかかわりを考えた。そして臨時歯科検診までにどのような活動をしたらよいかという行動目標を考えた。

(2) 結果と考察

情報カードソフトから口腔内写真を提示した際の生徒の反応は、大別すると「腫れがよくなっている」「きれいになってる」「やったのにあまり変わっていない」の三つであった。歯肉の観察ポイントが生かされ、9月の状態から歯肉がどのように変化しているか自分で比較し観察できるようになっている。

次に生徒の習慣を整理すると、第1回個別指導（図1）では、「小刻みに動かす」「シャープペンで字を書く程度の力」「歯磨き剤の量は少し」の項目が高い。これを基に自己の行動目標を立てたところ、「1日3回磨く」「意識して磨く」「5分ぐらい磨く」の3項目を行動目標とした生徒が多かった。行動を整理することにより、不足している行動が明確になり、不足している部分から行動目標を考えたことが分かる。第2回個別指導では、1回目から2回目にかけての約3週間の様子をチェックした。その結果、図2に示すように正しい行動をしている人数は、第1回個別指導（図1）時に比べ全体的に多くなっている。特に「意識して磨いている」「鉛筆を持つような持ち方」の項目が高くなった。生徒の日ごろの習慣を整理したことにより、自分の不足している行動に気付き、歯肉の改善・維持のための行動目標をつかむことができた。（後略）

第1回個別指導 習慣を振り返る
～正しい行動をしている人数～
(単位:人数)

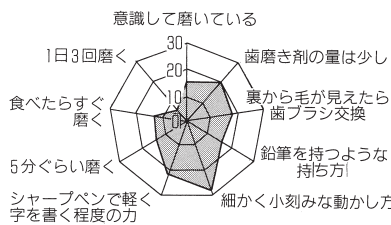


図1 習慣を振り返る（第1回）

第2回個別指導 習慣を振り返る
～正しい行動をしている人数～
(単位:人数)

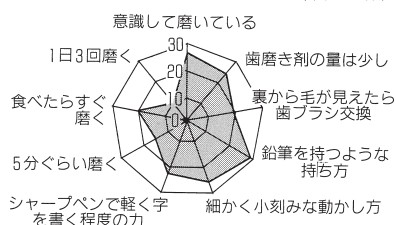


図2 習慣を振り返る（第2回）

3 健康を改善・維持するための行動を続けようとする気持ちをもてたか

(1) 活動の概要

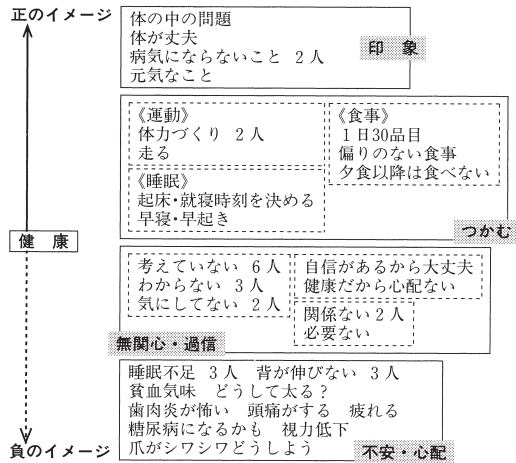
9月から臨時歯科検診までの3枚の口腔内写真（9月・個別指導・臨時歯科検診直前）を参考に検診を受け、歯肉の状態をチェックした。学校歯科医の診断・指導を基に、自分の行動と歯肉の変化とのかかわりを考え、学級活動から臨時歯科検診までの約2か月間の取組を通して、体や健康について感じたことをワークシートに記入し、健康ファイルにとじ込む活動をした。

(2) 結果と考察

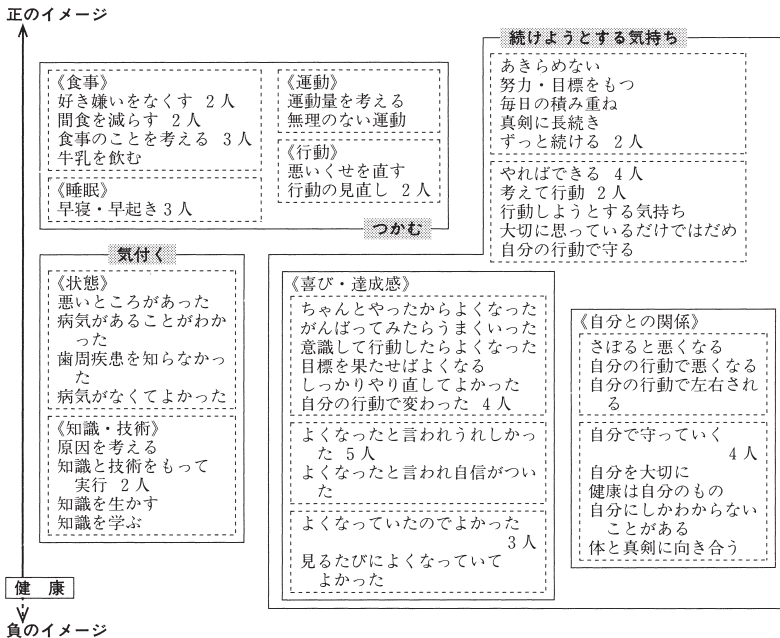
臨時歯科検診結果では、9月の時点で健康者（18人）は、全員が健康な歯肉と診断され、歯周疾患のある生徒は、17名中16名が改善したと診断された。

約2か月間にわたる保健指導の取組から、生徒の健康に対するイメージは、資料2から資料3のように変容している。学級活動前の

資料2 健康のイメージ（授業前）



資料3 健康のイメージ（臨時歯科検診後）



健康についての考え（資料2）では食事・睡眠・体力に関する行動目標をつかんでいる生徒はいるものの、健康に対して過信・無関心な生徒や不安・心配のある生徒が目立ち、「気付く」「続けようとする気持ち」の部分は現れていない。全体的に健康に対して負のイメージを抱いている生徒が多い。このような生徒に対し継続的な保健指導を展開することにより、資料3のように健康に対するイメージが変化した。健康を維持するためには「状態の理解」「知識と技術」が必要なことに気づき、健康を維持するための具体的な方法（運動・食事・睡眠）をつかみ、「自分の行動で変わった」「うまくいった」「やりなしておよかった」という達成感を体験した。このようなことから、「自分の行動で悪くなる」「自分で守っていく」というように、健康を自らのこととしてとらえ、「毎日の積み重ね」「ずっと続ける」「やればできる」など、続けようとする気持ちが現れてきた。（後略）

VI 研究のまとめと今後の課題（略）

第4節 総合的な学習の時間を推進するための研究の在り方

I 「総合的な学習の時間」のねらい

これからの学校教育において強調されていることは「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、子供たちに「生きる力」をはぐくんでいくことである。この「生きる力」の中核は「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」である。この「生きる力」をはぐくむために、各学校が創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成、特色ある教育活動の展開、特色ある学校づくりが求められている。その核となる教育活動が「総合的な学習の時間」である。

1 特色ある教育課程の編成

(1) 教育課程における位置

「総合的な学習の時間」の位置

教育課程に「総合的な学習の時間」がどのように位置付くのかを見たとき、既存の各教科、道徳、特別活

動に並ぶ「第4の領域」という言い方は必ずしも適切ではない。むしろ、既存の三つの領域に分化した内容を、横断的に結び付けて統合化する機能をもつものとして新たな「時間」を設けたと考えられる（図1）。この位置付けから、各教科・道徳・特別活動の指導と「総合的な学習の時間」の指導は、密接な関係をもって進めなければならないことが分かる。したがって、各教科等と「総

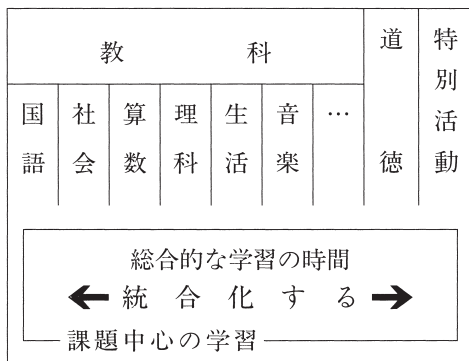


図1 「総合的な学習の時間」の位置付け（小学校の例）
（『総合的な学習の進め方 基礎・基本』日台利夫による）

合的な学習の時間」は互いに支え合う関係、補い合う関係にあるといえる。

(2) 「総合的な学習の時間」の特徴

特色ある教育課程のかぎ

「総合的な学習の時間」には、以下のような特徴がある。

- ねらい、教育課程上必置すること、授業時数などを示すにとどめ、各教科等と異なり、目標、内容等が示されていない
- 各教科等にまたがる学習活動である
- 教育課程上の具体的な名称については各学校において定める
- 各学校における創意工夫を生かした学習活動である
 - ・ 学習内容や学習活動の弾力化
 - ・ 年間の授業時数の運用における弾力化

このような特徴を踏まえ、子供たちの実態、目指す子供像、地域の実態や特色、学校で重点的に取り組んできた実践や研究の経過、学校や地域社会で活用できる諸施設の状態等、その学校の諸条件を生かし、そのよさを生かすことが特色ある教育課程のかぎとなる。

児島邦宏は『教育課程経営の考え方』において、特色ある教育課程について次のようなことを挙げている。

- ① 個性を生かす教育という面から、チームティーチングをはじめとする指導体制、指導組織の弾力化、グループ学習や異年齢集団による学習形態、学習集団の弾力化をどう図るか。
- ② 日課表、時間割、1単位時間と、[ゆとり]という視点からの時間の弾力化をどう図るか。

時間の枠に内容や活動を合わせるのではなく、内容や活動が時間の枠を決めるという逆転の発想が求められている。
- ③ 学習の場、学習環境を、体験的・実践的な学習、問題解決的学習という方法的原理に立って、どのように拡大、深化、再編を図っていくか。さらに、情報環境としての学校内外の学習環境の再編・整備をどう図るか。
- ④ 「開かれた学校」をどう実現していくか。地域の人々との交流、学校間

交流、地域の人々の学校支援・協力、地域環境の活用等を通して、「共に生きる」ことの意義を体験的にどうつかみ、自己の確立を図っていくか。

このことを「総合的な学習の時間」に当てはめて考えたときに、例えば、学校における創意工夫を生かした学習活動を展開するに当たって、学習内容や学習活動の弾力化については①や③や④を、年間の授業時数の運用における弾力化については②を考えておくことが大切である。

2 特色ある教育活動の展開

特色ある教育活動 の要となる

子供の実態、子供の興味・関心、学校や地域の特色を踏まえた教育活動を創り出すとき、その活動は、特色をもったものになっていく。その特色ある教育活動の^{かなめ}要となるのが、「総合的な学習の時間」である。学習指導要領（平成10年告示）においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとしている。

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、*自己の生き方を考えることができるようにすること。
*高等学校は自己の在り方生き方

このねらいは、いずれも「～を理解する」というような到達目標的なものではなく、自らをより高めていく方向目標的なものであるところに特色がある。そして、「総合的な学習の時間」が各学校において創意工夫を生かした学習活動を行うものであること、この時間の学習活動が各教科等にまたがるものであることから、各学校の主体性、創意が極めて重要となってくる。各学校では、「総合的な学習の時間」の趣旨やねらいに即して適切な活動を行えるように、自校の実態に応じた学習内容や活動の選択についての話し合いや学校としての合意の形成が大切となる。

また、学習の展開に当たっては、次のような点に留意しながら学習を進めることが大切である。

① 体験的な学習、問題解決的な学習の重視

子供たちの課題意識を育てるために自然体験や社会体験などを学習に取り入れることや、子供自身が課題を見いだし追究していけるようにすることが大切である。

② 各教科等との関連を図った指導

これからの学校に必要とされていることは、それぞれ別々に獲得した知識や技能を結び付けて、課題解決に当たる機会や場を提供することにあるともいえる。個々の事柄を関連付けたり、様々な事象を全体的にとらえたりするなど広い視野をもって総合的に把握して判断を下し、自らの生き方に反映させるものの見方や考え方を身に付けるようにしていくことが大切である。そこで、各教科等で身に付いた知識や技能などが子供の中で相互に関連付けられ、総合的に働くように、各教科等との関連を図った指導を行う必要がある。

II 「総合的な学習の時間」の研究の視点と方法

自校の総合的な学習
を「ねらい」や子供
の実態から見直す

学校では、創意工夫し、編成した教育課程の中に「総合的な学習の時間」（以降、総合的な学習という）がどのように位置付いているかを見直し、よりよいものに修正していく必要がある。その際、「ねらい」や子供の実態から総合的な学習を見直していくことが大切である。

総合的な学習は、各学校の創意工夫を生かして、全職員の合意の下で構想され実施される。総合的な学習にかかわる課題は、実践の中で見付けられることが多いが、構想段階から課題を見いだし、学校全体で共同研究として取り組む必要がある。

構想上の課題は、例えば、子供がじっくりと学習に取り組めるゆとりをも

った計画であるかなどの吟味から見いだすことができる。実践上の課題は、学習内容・方法を子供自身がつくっていくというゆとりのある学習になっているかなどの吟味から見いだすことができる。その課題に研究として取り組んでいく場合には、第2章に挙げた研究方法を活用して解決していくのである。

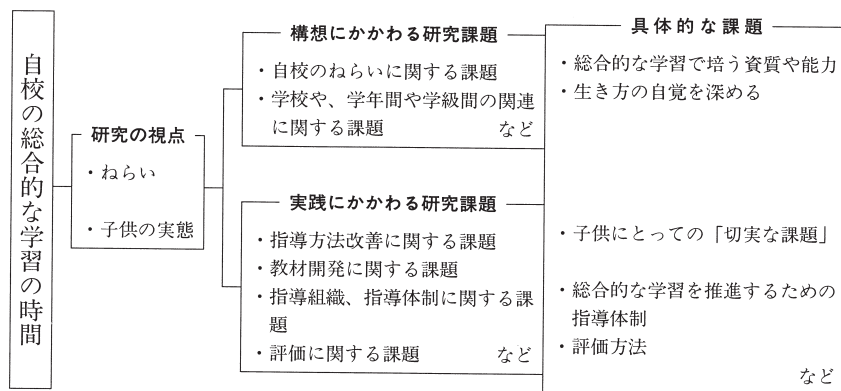


図2 総合的な学習の課題の例

1 構想上の課題

(1) 自校のねらいに関する課題

子供が何を身に付けたか調査し明らかにする

これまでの総合的な学習において、各学校でどのようなねらいを設定し、そのねらいを達成するためにどのような学習活動を展開してきたか、結果として個々の子供たちにどのような資質や能力が身に付いたかをとらえていくことが大切である。その際、総合的な学習のねらいと子供の実態から、自校のねらいを見直す視点を設定し、調査研究や授業研究などを通して、課題を明らかにしたり、解決したりすることが大切である。

例えば、調査研究において、次に示すように問題解決の能力から視点を設定し、個々の子供が何を身に付けたか調査し明らかにすることは、自校のねらいに関する課題をつかむ上で極めて重要である。

- 課題に興味・関心をもち、自分から進んで追究しようとしたか
- 自己課題についてグループで話し合い、課題追究の計画が立てられたか
- 課題追究では進んで情報収集を行い、記録に残すことができたか
- 課題追究の成果から必要なものを取捨選択し、まとめを行い、発表に生かしたか

(2) 教育課程に関する課題

位置付けや意味付けをとらえ直す

目指す子供を育成するために、総合的な学習のねらいを基に、教育課程の中での自校の総合的な学習の位置付けや意味付けをとらえ直すことが大切である。例えば、以下のような視点で教育課程を見直し、課題をとらえることができる。

- 総合的な学習の経験を積み重ねることにより、子供たちがどのような学習課題を求めるようになるか、系統性などを含めて学びの発達をどのように把握するか
 - 総合的な学習は、各教科、道徳、特別活動との関連をどのように図っているか
 - 子供や学校の実態、地域の実態などがよく反映された学習活動になっているか
 - 国際理解、情報、環境、福祉・健康など、選んだ課題は必然性のあるものになっているか
 - 構想した学習活動は、子供一人一人の興味・関心を基にした体験や学びの過程で補われ、修正していくことができるかなど柔軟性があるか
- 教育課程に関して見いだした課題を解決する方法として、調査研究などが考えられる。

2 実践上の課題

指導方法改善に関する課題

総合的な学習の実践を通して、教師が子供の学び方や問題を解決する力や態度が育っていないと感じたとき、そこに指導方法等にかかわる課題が生まれる。その際、教材開発や指導

の工夫によって、子供の変容が見られるのかという視点からの研究が始まる。

総合的な学習は、体験的な学習や問題解決的な学習を重視していることから、例えば、ねらいを達成するために問題解決の過程における指導方法を見直し、実践を通して課題を解決していくことが考えられる。

以下は、問題解決的な過程における指導方法を見直す視点の例である。

① 問題をつかむ過程

- ・ 出会いの場など、問題意識を形成する学習環境はふさわしかったか
- ・ 一人一人が自己の問題を見いだすことができたか

② 問題を追究する過程

- ・ 個人あるいはグループでの情報収集など、多彩な展開が行われたか
- ・ 多様な活動が行えるように情報の所在、情報収集の仕方などの支援が行えたか

③ まとめる過程

- ・ 収集した情報をどのようにまとめ、表現しようとしたか
- ・ 多様な表現ができるような支援ができたか

こうして見いだした課題を解決していくための方法として、授業研究が考えられる。

III 先進校の取組

1 資質や能力をどうとらえたか

総合的な学習を通して、培いたい資質や能力を神戸大学発達科学部附属明石小学校では、以下のようにとらえている。

事例 神戸大学発達科学部附属明石小学校

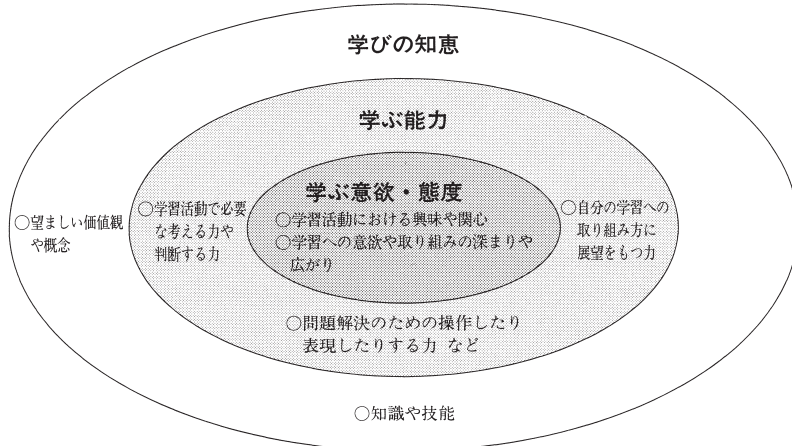
明石小学校では、総合的な学習で培う「自己形成力」を以下の三つの観点で層構造をなすものとしてとらえている。

「学ぶ意欲・態度」…学習全体を通じて持続されるべき興味や関心の総体で

あり、学習の取り組みの深まりや広がりを示す。

「学 ぶ 能 力」…考える力や判断する力、表現する力など学習の展開過程で発揮される様々な能力の総体を示す。

「学 び の 知 恵」…学習を通して得られた知識や技能を含め、望ましい価値観や概念の総体を示す。



(『生きる力を育む総合学習の展開』神戸大学発達科学部附属明石小学校研究会より)

2 子供にとって「切実な課題」となるようにするために

追究する価値があるかどうかの判断は、子供にゆだねられているといえる。

総合的な学習においては、必然性や切実感を伴った子供にとって「切実な課題」の設定ということが、重要な意味をもっている。この「切実な課題」は、すべての子供がもっているわけではなく、「切実な課題」がもてるような「活動」を設定することが必要となる。「～は、どうなっているんだろう」「～なのは、なぜだろう」「～について、調べてみたい」といった疑問や思いは、何もないところから生じるのではなく、具体的な事物に触れたり、事柄を体験したりする中から生まれてくるものである。

事例 上越教育大学学校教育学部附属小学校

5年生では、牛の飼育活動を行う。大型動物の飼育では、飼い続けるために様々な問題が生まれてくる。成長に伴い増えていく餌の確保、飼育環境の改善、さらには去勢といった問題。特に、「牛を売りに出すかどうか」といった問題は切実な問題となって子供にふりかかる。子供は、餌や飼育環境だけではなく、それまでの飼育を通して培ってきた牛に対する心情を基に話し合う。子供は悩みながら考え続ける。どうにかして結論を見いだそうとして様々な視点からアプローチしていく。牛乳や乳製品について調べたり、屠殺場の様子を見学したりしていく。

教師の思い（抜粋）

…秋になり、2頭をどうするかが現実の問題となってきた。購入費用の10万円を返すことや冬場の飼育の難しさを理由に売り出さなければいけないと主張する子供と、売りに出たくないという子供の考えが対立した。牛肉のことを調べ、食肉公社（屠殺場）のビデオを見るにつけ、肉として売りたくはないという子供の思いは強くなっていった。ここでは、子供が葛藤する場面を意図的に設定した。そうすることで、「いのち」に対する子供の考えが揺れることを期待した。日ごろ何気なく食べている肉にも「いのち」があることを実感し、それを食べている自分に気付いてほしかった。

子供の思い（作文から）

冬を迎え、子供の考えは、質的に変化してきた。

陽子さんは、「いのちあるものは輪になっているようです。いのちあるものはいのちあるものを食べているのです。つまり大きな輪になっているのです。私たちの心の中に生き続けるのです。私も少しだけ考えが変わってきました。売ってもいいと思えるようになってきました。」と作文に書いた。

また、詠一君は、次のように書いた。「人間と動物のいのちは比べられないです。生きているものすべてのいのちは大切に、順番はつけられないのです。昔から人間は牛を家畜として飼ってきました。しかし、牛は利用されるためにいのちを与えられたのではなく、牛として精一杯生きるために生まれてきたのです。牛のいのちを大切にすることは^{*1}マックと^{*2}バシルの立場で考えなければいけません。」（^{*1,2}牛の名前）

琢郎君はこう書いている。「生きているものが死ぬと、表面的には消えたように思えるいのちも、人の心の中ではいつまでも生き続けるのです。また、牛

肉や豚肉は牛や豚から、牛乳やバターは牛から、という具合に、生きるために必要な物は、すべて生き物からとれるのです。これからは、お互いが助け合える社会をつくってあげたいと考えます。」

子供の問題意識を刺激するような事実との出会いや場面設定がある。その中で、子供は追究せざるを得ないような問題に出会うのである。

(『Wan Cha』上越教育大学学校教育学部附属小学校より)

3 生き方を考えることができるように

総合的な学習のねらいの一つに「自己の生き方を考えることができるようにすること」とある。直接、生き方を考える学習を設定することも考えられるが、どのような課題に取り組もうとも「一連の学習を通して、自分はその問題について今後どのようにかわっていくのか」を一人一人が考えることが大切である。

事例 群馬大学教育学部附属中学校

自己の生き方について自覚し、生きる力を主体的に身に付けようとする生徒の育成のために、次の(1)～(5)を研究のねらいとして取り組んでいる。

- (1) 生き方の自覚を深めるための生徒像を明らかにする。
- (2) 「情報に接しテーマを設定する」段階における社会の今日的問題のとらえ方を明らかにする。
- (3) 生き方の自覚を深めるための討論の在り方を明らかにする。
- (4) 各学年の学習活動過程を「生き方の自覚を深める」視点から見直す。
- (5) 生徒が自らの活動を振り返り、学習を継続していくための評価の在り方を探る。

以下、(3)生き方の自覚を深めるための討論の在り方について述べる。

討論を行う有効性の一つとして、討論を通して、自己の活動を振り返り、自分の生活を見直したり、よりよい社会をつくるために自分にできることを見いだしたりして、自己の生き方にかかわる見方を広げ考え方を深めていくことが挙げられる。そこで活発な討論を行うためには、テーマに対する自分の考えをしっかりとまとめておき、討論に臨むことが大切である。そこで、互いの追究結果を基に、自分の生き方の自覚を深めるための討論を行うに当たっては、それまでの自分の追究結果をまとめ、自分なりの考えを明らかにしたり、提言として他に働きかける内容を明確にしたりしておくことが必要となる。（『群馬大学教育学部附属中学校研究紀要第47集別冊 生き方総合』より）

次に、生き方交流Ⅲ—卒業研究—『友好都市・前橋の在り方とその交流のために必要な私たちの心』のまとめ部分（抜粋）を示す。

…実際にイタリア人やイギリス人との交流を通して、相手の日本に対する興味・関心点は様々だったが、それを一つ一つ聞くことにより今まで自分では気付くことのできなかった日本のよさや特徴に気付かされた。よって、お互いを理解し合うというのは相手を知ることだけでなく、自分や自国を理解することだと感じた。だから、これからいろいろな人とのかかわりをもっていく私たちは、外国人との交流を通して、もっと自分というものを考えるべきなのだ。そして何よりも大切なのは『心』である。…国際交流とはいつでも、それは人と人との交流に変わりはない。確かに難しいことだけれど、それ以上に自分と違った文化を学ぶというのは楽しいことなのだ。21世紀を迎えようとしている今、国際交流においても普段の生活においても、日本人が今まで大切にしてきた『独特の文化』や言葉では言い表すことのできない『真心』を大事にする心が、私たちにとって必要であると考えます。そして私は、外国人だけでなくすべてのまわりの『人』と高め合っていけるように、この国際交流に対する興味・関心を大切にしながら生きていきたいと考えている。

…………… * “真”の心の交流のために必要なこと七か条* ……………

- 一、自分とは違うという先入観をとりはらうこと！
- 一、チャレンジ精神を大切にすること！
- 一、コミュニケーションは言語でなく「心」でとること！

- 一、誠心誠意相手に接すること！
- 一、自国の文化を理解し大事にすること！
- 一、相手との共通点だけでなく相違点から学ぶこと！
- 一、とにかく楽しんで交流すること！

4 子供を伸ばす評価の工夫について

子供の評価は、子供たちの学習を直接促進させることを目的としている。そのために、学習のそれぞれの過程や終末段階において、子供のよい点や進歩の状況等を自己評価や相互評価、教師の評価等を行い、子供の学習意欲の向上につながるようにすることが重要である。

事例 群馬大学教育学部附属小学校

子供たち自らが期待感や充実感を高められるような自己評価を促すとともに、子供たちの期待感や充実感のみとりをより充実させる手だてとして、ポートフォリオを用いた評価の工夫を行っている。ポートフォリオを用いた評価の特徴として、それぞれの子供の学習の歩みや現在の学習状況、さらには次に取り組むべき課題が時系列的に明らかにされるとともに、自己の学習の過程や結果を絶えず自己評価しながら、自己成長を遂げていくことができるということが挙げられる。

本校においては、問題解決的な学習において、学習カードや作品などからポートフォリオを作成し、それを集積する中で行われるポートフォリオ的评价を取り入れた。これは、授業内から授業外にわたって行われる評価である。

○ 授業内におけるポートフォリオ的评价

- ・子供たちは、作成した学習カードや作品などを規準に照らして、重要なものがあるかどうかを判断したり、選択したりする自己評価を行い、期待感や充実感を高める。そして、自己評価したすべての学習成果を集積し、ポートフォリオを作成する。
- ・教師は、子供たちの自己評価の様子から期待感や充実感の高まりをみと

り、支援する。

○ 授業外におけるポートフォリオ的評価

- ・教師は、作成されたポートフォリオから子供たちの期待感や充実感の高まりをみとり、次時や次単元に向けての支援の計画を立てる。

表1 学習過程におけるポートフォリオ的評価

過程	心	学習活動	ポートフォリオ的評価		
			基準	自己評価	みとり
つかむ 追究する 広げとめる	期待感	①課題と出会う ②共通体験をする ③めあてをつかむ ④計画を立てる	自分にとっての価値ある発見	○学習プリントに記述した内容を振り返って付箋紙を貼ったり、線を引いたりする ○活動を振り返って、学習プリントに記述する	○体験したことを発表したりめあてを立てたりする際の活用
	追	⑤調査的、交流的な体験をしながら追究する ・調べる ・準備する ・中間交流する など		○調べたり、準備したりする際の活用 ○次の体験や中間交流、まとめをする際の活用	○本時の子供の姿を予測する資料 ○支援計画を立てる ○ポートフォリオにコメントを記述する
	充実感	⑥まとめの活動をする ・発表会 ・交流会 など			○予測と実際の姿とを比較する

(『群馬大学教育学部附属小学校研究紀要 平成12年度紀要50』より)

参考文献

- 『小学校学習指導要領解説 総則編』 文部省 (1999)
- 『実践をふり返り改善するポイント』指導と評価2000年7月号 高階玲治 図書文化 (2000)
- 『新しい教育課程と学習活動の実例 総合的な学習』 天笠 茂 東洋館出版社 (1999)
- 『総合的な学習の実践事例と解説』 「総合的な学習」実践研究会編集 第一法規 (1999)
- 『生きる力を育む総合学習の展開』 神戸大学発達科学部附属明石小学校研究会 東洋館出版社 (1997)

- 『総合的な学習の多様な計画&実践』 新井郁夫編 東洋館出版社 (1999)
- 『総合的な学習の進め方 基礎・基本』 日台利夫 東洋館出版社 (1999)
- 『総合的な学習の時間の計画・実践・評価Q & A』
加藤幸次監修 九州個性化教育研究会編 黎明書房 (2000)
- 『実践 特色ある学校づくりー新しい教育課程経営をめざしてー』 小学校編・中学校編
高階玲治・村川雅弘編 図書文化 (2000)
- 『みんなで総合しよう COUNT DOWN 2002』
上越教育大学学校教育学部附属小学校 (1998)
- 『研究紀要第47集別冊 生き方総合』 群馬大学教育学部附属中学校 (2000)
- 『学びを楽しむ子供の育成 (第3年次) 一期待感・充実感を高めるポートフォリオ的評価
の工夫ー』 群馬大学教育学部附属小学校 (2000)
- 平成9年度 研究紀要 第5号『横断的・総合的な学習の時間に関する調査研究』
群馬県総合教育センター (1998)
- 平成11年度 研究紀要 第7号『総合的な学習の時間に関する調査研究』
群馬県総合教育センター (2000)

